中央大学の歌

―白門に栄光あれ―

はじめに

本学において、かってうたわれてきた歌、現在もうたわれている歌を、小誌「Ｈａｋｕｍｏｎちゅうおう」（在学生対象誌）に、掲載してきたものを、別冊として纏めたものですが、それぞれの歌にはそれぞれの時代とその背景があります。

或る時代にうたわれた歌が現在もうたいつがれている、あるいは、うたわれなくなってしまった歌もあります。しかし、それらは、その時代を生きた人達の心に深く残っていて、同期会・同窓会や学員会支部総会など中央大学卒業生、学生を問わず、時代を超えて共通分母で共感を得てうたわれているのです。此度、平成七年三月刊の「中央大学の歌」の第二版を刊行する運びとなりました。

この小冊子によって、これらの歌の風化を防ぐ事が出来たのなら、そして、次代へ伝えられて行くことができれば幸いなことであります。

平成八年三月

中央大学　広報部

中央大学の歌　目次

広報部

はじめに……4
「校　歌」……5
校　歌　1　（宮脇信介作詞　中田　章作曲）……8
校　歌　2　（小林一郎作詞　山田耕筰作曲）……11
現　校　歌　（石川道雄作詞　坂本良隆作曲）……16
「応　援　歌」……17
あゝ中央の若き日に（中央大学学友会選定　古関裕而作曲）……20
晢ひの殿堂（和田芳恵作詞　諸井三郎作曲）……23
中大健児の歌（河尾俊雄作詞　鈴木大八郎作曲）……26
「学　生　歌」……28
中央大学学生歌（岡本明久作詞　富永三郎作曲）……31
中大神田節（作者不詳）……31
書生節（作者不詳）……31
中大五万節（作者不詳）……31

大学数え歌（豪気節）（作者不詳）……32
キャンパスソング（久保友継作詞・作曲）……33

「予科の歌」
首途の歌・建業の歌・送別の歌（村上道太郎作詞・作曲）……35
伊豆逍遥歌（村上道太郎作詞・作曲）……40
惜別の歌（島崎藤村作詞　藤江英輔作曲）……47

「白門の由来」……53
あとがき……57

校歌の変遷と背景

校歌1　大正十年～
校歌2　大正十五年～
現校歌　昭和二十五年～

一、三つの校歌

中央大学の校歌は、大正十年（1921）に制定されたのを初めとする。

それ以前に校歌もしくはそれに類する歌がうたわれていたという形跡は、現在のところ見つけることはできない。大正十五年（1926）に至り、第2校歌が制定され、さらに、昭和二五年（1950）に第三番目の校歌が制定されている。これが、現在うたわれている校歌である。

このように、中央大学には創立百余年の歴史を刻んできた中に三つの校歌が存在していたこととなる。校歌は、創立以来変わらぬ大学もあろうが、わが大学のように今日までに、二度の改定をした大学もある。

改定をするについては、それなりの理由や事情があったからであるが、第1校歌は、中央大学発祥の地、東京神田錦町に校舎があった時代の校歌（作詞宮脇信介、作曲中田章）、第2校歌は、神田駿河台に校舎を移転してからの校歌（作詞小林一郎　作曲山田耕筰）である。

この二つの校歌の改定された事情や理由について、双方に、共通して言えることは、時代に適わない歌詞となったことによると、此処ではとりあえず言っておきたい。

（校歌について述べてゆくとき前の校歌に触れざるを得ないこと、また、校歌の変遷と背景乃至はその周辺としてこの稿を纏めようとするとき、この三つの校歌は、それぞれに関連が出てくるので、便宜上「校歌1」「校歌2」「現校歌」と記述してゆくことを、初めにお断わりしておきたい）

二、校歌1

明治十八年（1885）東京神田錦町に呱呱の声をあげた中央大学の前身、英吉利（イギリス）法律学校は、明治二二年（1889）校名を東京法学院と改める。明治三六年（1903）専門学校令により、東京法学院大学と改称し、明治三八年（1905）に至り中央大学と再改称し、現在に至る。大正九年（1920）大学令による設立認可を受け、名実ともに大学の陣容を整えることとなる。

そして大正十五年（1926）神田駿河台へ移転するまでの四十年間を錦町校舎時代とでも言い得ようか、ずっと神田錦町を動くことはなかったのである。

校歌1は大学令による大学設立認可を得た翌年の大正十年に制定されるが、あたかも、大学設立認可を得たことを祝うかの如く制定されたのである。

建学から四十年になろうとするこの期まで校歌らしき歌がなかったために、野球試合の応援にも困るというので、野球部が先頭に立って、校歌の制定を要望する声が急に高まってくる。学校当局もその要望を容れて校歌を制定することにきめ、そしてまず、歌詞を、学生をはじめ学内関係者から募集することとなり、歌詞募集の掲示が貼り出された。

作詞者は、宮脇信介氏、当時、専門部法学科三年在学中であり、第二次弁護士試験受験のため連日徹夜の如き猛勉強中であったがこの掲示を見て、歌詞を書いて見ようと思い、応募してみた。応募してからそのことを忘れかけていたある日、入選の通知を受け、びっくりして大学へ出向いたら、一等ではなく二等で入選となっていました。

とは、宮脇さんからの聞き書きである。

一等の入選作がなかったため宮脇さんの歌詞が、そのまま校歌に採用されることとなり、まことに幸運であったという。

その後、宮脇氏は、弁護士試験に合格し、大正十一年卒業後、直ぐに弁護士を開業した人である。（当時、弁護士には、研修制度はなく、試験に合格すれば直ちに登録し開業できた）ちなみに、この時の入選賞金は二十円であったと言う。

平成元年六月逝去　享年九二歳

作曲者は、中田　章氏、東京音楽学校の理論及びオルガンの教授で、有名な、春は名のみの／風の寒さよ（早春賦）などを作曲した人である。

昭和六年十一月逝去　享年四五歳

この校歌は、昭和四十年頃までは、口ずさむ人もいて、通称「五千の学徒」などと称され、親しまれてきた。これは、当時流行であったEP盤レコードに校歌1、校歌2そして現

校　歌　1

宮脇信介 作詞
中田　章 作曲

♩= 72　勇壮に

f

ちゅうお　ーだいが　くこれわ　がぼこう

ようよ　うはてな　きそのな　のもとに

ほうけ　いしょう　ー　のごせん　のがくと

いそし　みはげめ　りこれわ　がーぼこう

校歌 1

作詞　宮脇信介
作曲　中田　章

中央大学これ吾が母校
洋々はてなきその名のもとに
法経商の五千の学徒
いそしみ勵めりこれ吾が母校

巍峨(ぎが)たる大屋(たいおく)これ吾が校舎
三十余年の不撓の歴史
華と咲きては錦の町に
巨城と立てりこれ吾が校舎

質実剛健これ吾が校風
雲よぶ龍は地中に潜み
潯蹴る巨鵬は雌伏すとかや
堅忍自重これ吾が校風

校歌が裏表で収録され発売になったことにより、古い卒業生たちの郷愁を誘うものがあったのかもしれない。

ともあれこの校歌は大正十五年（１９２６）本学が駿河台に移転するまでの六年間うたわれたことになる。

この校歌１の曲を、初めて聴いた時は、重厚なうたいだしで、かなり古びた曲に感じられ、荘重な趣に明治、大正の匂いがするなぁと思ったものである。何回も聴いているうち、ついに覚えてしまったが、現代のリズム感やテンポと比べると、かなり大きな隔たりがあるようである。

例えば、夏の甲子園・高等学校野球大会で、勝ちチームの校歌が、校旗掲揚とともに球場内に流れるが、明治〇〇年創立の歴史を持つ学校のそれを聞くとき、この中央大学校歌１に似た感じを受けるのである。現代感覚のリズムや感性からは、些か遠のく感じであり、古いなあと感ずるが、本学の校歌１を思い出しなにやら親しみが涌いて来る。

音楽については、門外漢であるから、この校歌１については、迂闊な論評はできないけれども、現代感覚からは、やはり少しく古典である。

三、駿河台へ移転

本学が、錦町から駿河台に移転したことによって（当時は、南甲賀町と言い、駿河台と町名が変わるのは昭和八年一月のことである）、この歌はうたえなくなってしまう運命となる。すなわち、歌詞中にある〈錦の町〉の部分を替えればよいというだけではすまされず、早晩改定しなければならない内容でもあった。たとえば、歌詞の中で〈三十余年の不撓の歴史〉とか〈法経商の五千の学徒〉などである。

〈三十余年〉は、四十年以上経ってしまえばもはや意味をなさなくなるし、〈法・経・商〉は、新しい学部が設置されれば困るし（この時点で考えれば先のことではあったが、昭和二四年には工学部が設置され、のち昭和三七年には理工学部と成る。また、昭和二六年には文学部が設置される。そして、平成五年には総合政策学部が設置されている）等から考え合わせれば、いかに、その時点での実情に合わせて作詞されているかが判る。

また歌詞の中の〈五千の学徒〉は、学生が、六千人以上になれば困るしという具合である。ちなみに昭和十年ころの在籍者は、すでに六千人を超えている。

駿河台への校舎移転は、大正十五年の八月であるが、その年の暮には、昭和と改元になる。校歌１の歌詞内容が移転によって適わないことに加えて、駿河台に聳えるごとくに建設された新校舎に、心機一転の気概を込めて新校歌をの気運となるのは、時世の移り変わりを投影して当然であったかもしれない。

校歌といえども、まさに、歌は世につれであったのである。

四、校歌2

前述の状況変化により、その歌詞内容からもうたえなくなった校歌を改定する気運は急速に高まり、移転後の十一月には作詞もなり、山田耕筰氏に作曲を依頼し、成ったのが校歌2である。

作詞者の小林一郎氏は、この当時、本学教授であり、哲学者である。

昭和十九年三月逝去　享年六八歳

作曲者の山田耕筰氏は小林教授との関係もあり、この作曲を引きうけたのであったが、有名な作曲家というより、日本の交響楽運動の基礎を築き昭和三年の文化勲章受賞者であることは読者の方々の方がはるかに詳しいかと思うけれども「赤とんぼ」「この道」等の童謡唱歌から宗教音楽まで多方面に足跡を残し、文学や演劇にも多大の影響を与えた人である。

昭和四十年逝去　享年七九歳

（余滴）

大正十五年（1926）に、本学校歌を作曲している楽譜稿が残されているが、山田耕筰氏へ作曲依頼した原詩稿は、現在使用している中央大学用箋＝赤刷り全罫紙＝と同型である。紙一枚のことではあるが、そこに歴史の重みを感ずる。

この校歌の発表とか普及とかエピソードとて寡聞であるが、「昭和二年、当時予科長であった堀竹雄教授の家から、松坂屋の裏の十一屋というところへ、苦労してピアノを運び込んだ。弾き手は、〈椰子の実〉など島崎藤村の多くの詩に曲を付けた人、大中寅二氏である。うたうのは、絣の着物に袴姿のバンカラ中大生が取り囲んでの校歌発表会となった」と、中央大学新聞の記事に僅かに残されているぐらいである。

そして昭和二十年までうたわれたこの校歌は、終戦とともに、うたい出し部分の、〈皇国の礎〉がネックとなり、うたわれなくなってゆく運命をたどることとなる。

五、新校歌へのうごき

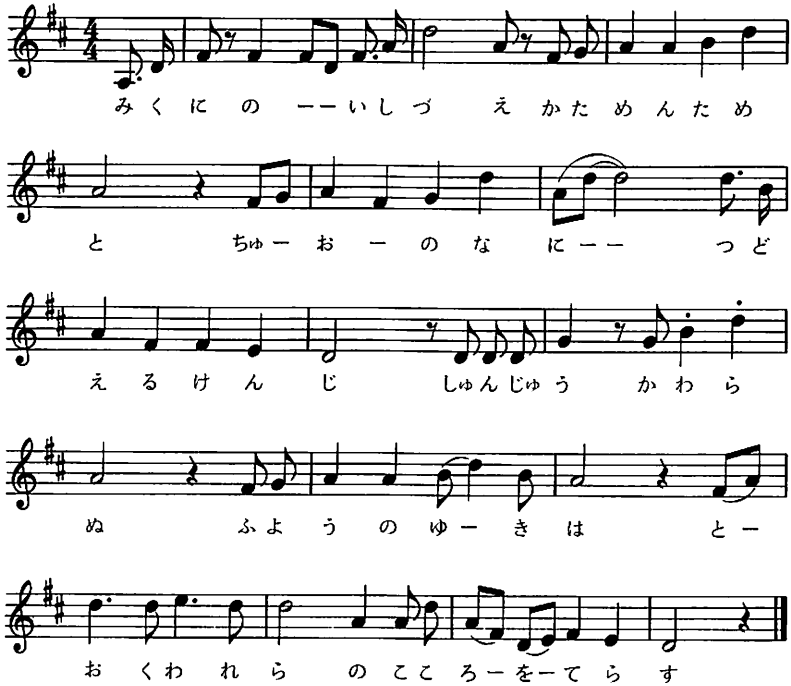
さて、現在うたわれている校歌が制定されたのは、昭和二五年八月のことである。

この校歌が制定されるについては、いくつかの要因があったが、約めていえば、昭和二十年（1945）八月の太平洋戦争の終結を以って、一変した国情に、それまでうたわれていた校歌が適わないのでという一点に帰結するであろう。

この辺りの事情を、中央大学七十年史は次のように記述し

校　歌　2

小林一郎 作詞
山田耕筰 作曲



校歌 2

作詞　小林一郎
作曲　山田耕筰

皇國(みくに)の礎固めん為と
中央の名に集える健兒
春秋かわらぬ芙蓉の雪は
遠く吾等の心を照らす

質実剛健撓まず倦まず
心を合わせ養い来る
貴き校風仰ぎて知れと
空に聳ゆる吾等が校舎

世界の進みに魁(さきがけ)すべく
心を鍛え身を鍛えんと
集まり来たれる健兒のために
前途を祝わむ諸声高く

ている。

「校歌の内容に、時代に適応しない箇所があったので、これを新時代に則したものに改めようとし、作詞を石川道雄に、作曲を坂本良隆に委嘱し……」と。

ここに言う、「校歌の内容に」というのは校歌2の歌詞で、改定の要点である時代に適応しない箇所というのは、ただ一箇所で、それはうたいだし部分の「皇国の礎（みくにのいしづえ）堅めんためと……」の詞句だけのように思われる。

第二次世界大戦は、我が国の敗戦により終結となり、同時に、従前からの皇国観がくずれ去った。訪れた自由・民主主義の社会に、皇国の礎とは、うたえなくなり、うたわなくなるのは、当然の趨勢でもあった。

昭和二十年八月十五日を画期として、国情、世情は一変したのである。

学制改革により、中央大学は、昭和二四年に所謂新制大学に衣更えし、なにもかもが180度転換するという世相の中の変革であった。

校歌「皇国の礎などという軍国調のものは、学生からも嫌われ、卒業式も校歌なしということになった」との中央大学新聞の記事にもなったりしたが、現実には新校歌が制定されるまではうたわれていて、たとえば、新入生に対して、毎日のように昼休みの大講堂において、この校歌の歌い方指導が行われていたのである。問題になっている「皇国（みくに）の礎」の箇所は、文字を御国（みくに）と替えていたことを記憶する。

しかしこの校歌の歌詞全体を、つぶさに検討して見ると、冒頭の／皇国の礎堅めんためと／を除けば、三番までの歌詞の中に、軍国調などと言い得る箇所は無いように思うのである。そして、うたってみるとよく分かるが、その曲のメロディは、けっして軍歌調とか軍国調とかいうのではなく、むしろ、ゆっくりと静かな曲であったし、感激性には乏しいといえるかも知れないが、良い曲であることが分かる。

さて、うたい出し部分に禍されたといっていいこの校歌2に代わり、新しい校歌の制定を望む学生の声が高くなり、まず、懸賞金つきで、歌詞の一般公募が行われたのだけれども、応募作の中に、校歌に相応しい歌詞が無かったということにより、選考委員会は、委員の一人でもあった故吹田順助教授に、この新校歌の制作について一任することとなった。

一任をうけた吹田教授は、独文学の関係で、詩人でもある石川道雄氏（当時山梨大学教授）に作詞を依頼し、同じく作曲を音楽大学教授の坂本良隆氏に委嘱することとなる。

このような背景、経緯から新作された校歌は、昭和二五年八月十五日、大講堂にほぼ満席、というから、約二千人の学生を集めて、大学関係者等立ち合いのもとに発表会を催したのである。

大学関係者は、辰野隆、吹田順助、大場俊助、松浦一、小田久蔵、山口忠夫の全審査員である。

日本コロンビアからは、男女二人の歌手が来場し（歌手の氏名は不詳）、歌い方指導を行い、学生による「草のみどり」の歌い初めとなる。

この時、伴奏は、ピアノ一台であったという。

大講堂は、入学式や卒業式に、また、白門祭、映画・演劇の会にも使われていたが、日常は、授業（講義）や公開講座、講演会などにも使用されていた。

ついでながら、この大講堂は、昭和十年、大学創立五十周年記念として建設されたものである。建設当時は、「まず我邦の現在においては、他にその比を見ないかと存ずるのであります」と、原嘉道学長が創立五十周年記念式典の挨拶の中で述べられているが、この威容は本邦随一であった。

この講堂は、音響効果に特に優れているのが特長で、壇上からマイクロホン無しでも全堂に声が届いたので演説会などには、よく利用されていた。

だから、この新校歌発表会のときにもピアノ一台で充分であったのかもしれないが、現在の入学式、卒業式における音楽研究会の吹奏楽部や管弦楽団の演奏とは比較のしようもなく質素のものであり、まさに中央大学らしく、質実剛健であったかと思う。

この日、作詞者、作曲者に対して感謝状が贈呈されたとも聞くが、そのほかの記録については、さだかではない。

六、現校歌の誕生

作詞者の石川道雄氏は、当時、山梨大学教授で独文学者であり、のち、北海道大学教授として赴任されるが、先生は、大学の理想のキャンパスとして北海道大学を描いておられたという話もあるので、草のみどりに風薫るは、この理想のキャンパス北大を心に描かれていて作詞されたのかもしれない。

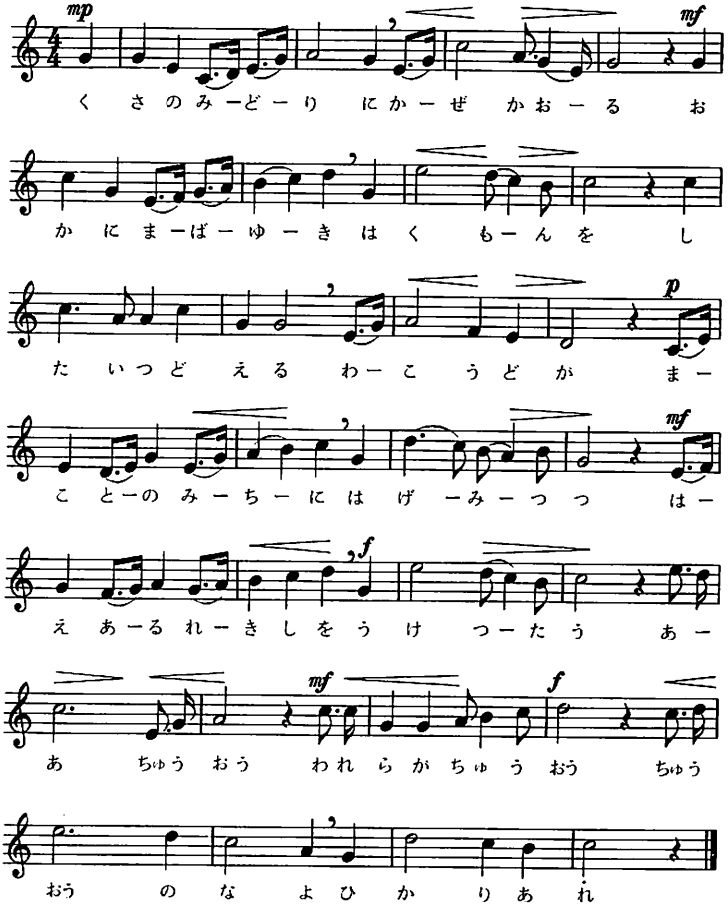
また、氏は、早くから詩作に親しまれ、詩人日夏耿之介氏の跋を得て、詩集「半仙戯」を上梓されている。この詩集に見る限り、詩風は洒脱で、社会風刺的であり、この詩集の中では、秋風吟という佳品が光っている。

昭和三四年二月逝去　享年五九歳

作曲者の坂本良隆氏は、昭和十年からドイツに留学し、ヒンデミット、シュタインに師事し、ベルリン音楽大学指揮科卒業、帰朝後は、指揮者、作曲者として、また島根大学教授、大阪音楽大学講師として教壇にたたれた。日本では、山田耕筰、信時潔に師事しているが、校歌2の作曲者山田耕筰と師弟関係にあったことに思いをいたせば、何やら浅からぬ縁で

中央大学　校歌

石川道雄 作詞
坂本良隆 作曲



中央大学校歌　作詞　石川道雄
作曲　坂本良隆

草のみどりに風薫る
丘に目映き白門を
慕い集える若人が
真理の道にはげみつつ
栄ある歴史を承け伝う
ああ中央　われらが中央
中央の名よ光あれ

よしや風は荒ぶとも
揺るがぬ意気ぞいや昂く
春の驕奢の花ならで
みのりの秋やめざすらむ
学びの園こそ豊なれ
ああ中央　われらが中央
中央の名よ誉あれ

いざ起て友よ時は今
新しき世のあさぼらけ
胸に血潮の高鳴りや
湧く歌声も晴れかに
自由の天地ぞ展けゆく
ああ中央　われらが中央
中央の名よ栄あれ

結ばれているような思いがする。「浅間の馬子歌」というような日本民謡をもとにした作曲が多く、中央大学グリークラブのために、万葉集の山部赤人作「田子の浦に打ち出て見ればま白なる富士の高嶺に雪は降りける」に曲をつけて贈ってくださったりしている。

昭和四三年五月逝去　享年七十歳

七、校歌余滴

㈠草のみどりと白門

さて、発表された新校歌がだいたい周知されてくると、歌詞の冒頭がすこしばかり議論の種となる。

「草のみどりに風薫る／丘に目映き白門を」がである。

当時の中央大学は東京神田・駿河台に位置し、つまり都心にあり、都市型大学のキャンパスである。どう見ても草のみどりに風薫るという情景にはない。ましてや、丘に目映き白門とは何か、白門とは何処にあるのか、等々、実景、実情に程遠い歌詞に対して、文句、非難ともつかない物言いをする者もあり、この校歌はおかしいよなどときめつける者さえあったりした。中には、作詞者の石川道雄氏が山梨大学教授であったことから、山梨大学のたたずまいをモデルに作詞したのではないのかなどと失礼な陰口をきく者さえいた。

「白門」が出来たのは、この校歌発表から九年後、昭和三四年八月八日のことである。当時、本学のキャンパス理想の一つであった表通り（聖橋通り）への進出？で、正門をこちらにすることとなり、白御影石の重厚な門柱を建造し、これを白門と称し、白門開通式を行ったりもした。このことにより、丘に目映き白門を、の詩句に対しては、一応の情景は整ったことになるが、草のみどりについてはどうであったろうか。この正門を入って左手に、いくばくかの芝生があるくらいのもので、樹木をいくら植えたからといって、草のみどりといいうるほどの情景演出はなし得なかったのである。

しかし、校歌における詩句に、校舎を含む実景、情景をしっかり捉えて表現されているとかいないとか、嘘をいっているとかいないとかいうのは、一つの側面からしかみていないと言うことになるのではないか。

作詞者が、どういう意識と意図でこの詞案を練ったのかを訊ねることは、今となっては出来ないが、即物的に実景のみを追って、詞は作られるものではない。現実を無視してよいというのではなく、理想を描きたいと思うのが作詞者の心情にはある。

校歌は、校地や建物のたたずまいや景観を歌う部分もあるだろうが、教育と研究を事業とする理想を第一に考えて作られるのが普通ではないだろうか。そして、大学の校歌にあっ

ては、その創立の趣旨や校風や、教育方針、理想などを掲げてある内容が、その歌詞となっていることが、いずれの学校の事例においても共通している部分であろう。

本学校歌における「草のみどり」とは学生・青年学徒を象徴し、「風薫る」とは、研究教育を基盤とする学風、校風を言うのである、と私は解したい。

さらに、「白門」についてはどうか。前述の通り、昭和三四年まで、中央大学に「白門」なる門は存在しなかった。

しかるに、白門なる語は、ずっと昔から存在していた。昭和三〜四年ころから白門の名は中央大学の別称として使われはじめ、昭和二三〜二四年には定着している。（なお、私は大正十年卒業生から、白門の名をきいたことがあるのだけれども、これには確証が無い）この時代に、「白門」は存在しなかったのに拘らず、白門は呼称されていたのである。

それは、卒業生、在学生を問わず、学部を問わず、中央大学の総称であり、本学出身者の心のうちにある歴史と伝統の絆である精神の連帯の証なのである。物的証拠の如くに「白門」が存在しなくとも、中央大学は白門なのである。だから、校歌にある如く、目映く輝いているのである。白門は、心のうちに在る、のである。これは少しく牽強付会の謗りを免れぬかもしれないが……。

現今、校歌に示される歌詞の如くに、多摩校舎がその理想を実現したかのように言う向きもあるが、それはそれとして、あまりにも即物的な面でのみ、物を見ているのではないかと思う。校歌がそれを予見したのであるとすれば、この作詞者は、昭和二五年にこれを予想したことになる。とすれば畏るべきこの作詞者の慧眼に敬意を表さずにはいられない。そして、かつて「草のみどりに風薫る」について実情に相応しくないといった人達は、今、何というのであろうか。

また、今になって、現校歌は、将来の多摩校舎を予測して作られたなどと、後ろ向きの予言者の何人かがあったと記憶するが、これはナンセンスであろう。

校歌の歌詞は、多摩校舎のたたずまいからすればまさにぴったりのうたい出しであり文句のつけようがない。しかし、校歌は、全学部、そして附属高校にまで及ぶのであることを考えてみれば、この歌にぴったりでない情景の校地の所では、些か疑問を抱く向きもあるかもしれない。

㈡レコード盤とカセットテープ

中央大学校歌は、昭和二六年頃レコードになる。SP盤78回転でA面に校歌、B面に応援歌で、歌唱秋元雅一郎、中央大学合唱団、コロンビアオーケストラの演奏である。

そののち、コロンビアから33回転のいわゆる、ドーナツ盤の大きさのLPで、通称ビニール盤が出るが、これには、A面に校歌、応援歌、B面に旧校歌1、旧校歌2が収められて

いる。いずれも音楽研究会、管弦楽団、グリークラブ、混声合唱団の演奏である。昭和五六年に至り、やはりコロンビアから、A面校歌、応援歌、B面惜別の歌、伊豆逍遥歌を収録し、EP盤で出されている。

その後昭和六十年、レコードにかわり「中央大学校歌」として、中央大学出版部からカセットテープが売り出された。これには、校歌・応援歌・中大健児の歌・惜別の歌・伊豆逍遥歌が収録されているが、片面は、吹奏学部の演奏のみである。すべて、音楽研究会吹奏学部の演奏とグリークラブの合唱である。

中央大学の歌も現在まで数え上げれば十指にもなるので、この何年か後には、CDになるかもしれない。

(三)校歌よ永遠なれ

校歌は、入学式、卒業式の時以外は、各サークル、クラブなどの集まりでうたうぐらいで普段はあまりうたわれていないようである。またその機会も少ないようである。そして、校歌を習う機会もほとんど無いと言ってよい。私の学生時代(四十年程前)、新入生のころには、新学期が始まってのほとんど毎日の昼休みに、大講堂において、応援団による校歌、応援歌の歌唱指導があった。現今の自由な服装の新入生と違い、当時の新入生の大方は、金釦詰襟の学生服で新品の学帽という格好だから(それに女子学生も少なかったし)、一目でそれと分かり、大講堂へ誘い込まれることとなる。

講堂の中では、応援団リーダー部員が大声を発し、うたい方を指導した、というより特訓が施された。これは一つの理由として、当時の野球試合のため神宮球場でうたえない者がいると困るのでこうしたのであるが、うたわされたという実感を抱く者もいて、その者たちは二度と昼休みの大講堂付近へ立ち寄らないようにしていたのを知っている。

今ではこれも懐かしい思い出の一つである。

私などは、神宮球場で野球試合の後、学友と肩を組み合いこの校歌をうたった方だが、全学生との一体感を味わうことができたと思うし、この感激は一つの青春の証でもあり、とくに、試合に勝った時はなおさらであった。ともあれこの校歌が誕生して四十余年になる。音楽研究会の吹奏楽部や管弦楽団によってこの校歌が演奏される時、荘重かつ軽快な行進曲風のメロディは、この編曲の妙もあり、気分爽快、なにやら勇気が湧いてくる感慨に浸れるのは筆者だけではあるまいと思う。実に良い歌である、とは、自画自賛がすぎようか、いや、そんなことはない。

永遠にこの校歌が歌い継がれていくことを信じているし、またそれを望むのは私だけではあるまい。

応援歌の変遷と背景

誓ひの殿堂　昭和六年〜
あゝ中央の若き日に　昭和二十三年〜
中大健児の歌　昭和二十七年〜

一　野球と応援歌

わが大学の応援歌のルーツをたどれば、野球の応援のために、校歌が必要だからと、急ぎ歌詞を募集し、制定したことは、校歌の変遷の稿に書いたが、この事情からいえば、校歌1は応援歌第1号であったことになる。

野球の応援歌がそのまま校歌のようになっている大学もあるところをみると、昔から、野球試合が大学の存在をPRするには恰好の機会の一つでもあったのであろうか。

野球というスポーツが現在のわが国におかれている位置は、全国高等学校野球、春、夏の甲子園大会、にみられるとおり、そして、大学野球におけるリーグ戦、都市対抗大会、さらにプロ野球にいたるまで、老幼男女を問わず過熱気味の支援を得ていると言う形に置換えられる。

野球が、何故このように、我が国において広く認められ、受容され、親しまれ、国民的支援のなかで、その共通感情が育ってきたのかを探るのはこの稿の主旨ではないので、いろいろ述べることは差し控えるけれども、野球はわが国における国民的スポーツとして明治初年から、戦前、戦後を通して理解されていることは、否定できない。

このような環境のなかで、大学野球の果たしてきた役割というものもある。そうしてその野球試合の応援にさいして、母校の栄誉を担って、試合する選手はもとより、校歌、応援歌を高らかにうたい、スタンドから応援する学生の姿は、青春の一つのステイタスでもあった。

現在では、野球部が二部リーグのため、この応援が出来ないこととなっているとかで残念であるが、両国国技館で行われる学生相撲大会においては、様相が少しばかり違うようだ

が、校歌、応援歌による応援をしているとのことである。

二　神宮球場での応援

「こちらは晴天に恵まれました神宮球場、午後一時の試合開始をまちかねた両校の学生達で、埋めつくされました内外野のスタンドは、熱気をはらんで、只今、応援団の太鼓の響きも高らかに、先攻の中央大学が校歌を歌い終わったところです。対します日本大学応援席は、中央大学のエールに、拍手で応えております。

二年ぶり、この東都大学の両雄が、共に勝点4で並び、久々に優勝をかけた一戦となり、両校の応援席は、いやがうえにも盛り上がり、殆ど両校の全学生が、この球場につめかけたのではないかとおもわれます。」

（これは、わが学生時代の、神宮球場での思い出を実況中継ラジオ放送風に誌上再現してみたものである）

さて、そして、試合開始がちかずくと、先攻側の大学からまず校歌をうたう、後攻側がこれに応えて、校歌をうたい、それぞれに、互いの健闘を期待するエールの交換がある。

そして、プレイボールと同時に、先攻側から応援歌がうたわれる。1回の表が終了し、1回裏の後攻側からの応援歌がうたわれる。ここまでは、大学同士の挨拶であり、儀礼的な意味合いが濃い。つまり、スポーツマンシップである。

そのあとは、チャンスとなれば、例えば、ワンダウン満塁などにでもなれば、待ってましたと、応援歌をうたいだすのである。ホームインして得点すれば、太鼓の音は、乱調子となり、再び応援歌をうたう。チャンスが多ければ、それだけ応援歌の出番も多くなる。

チャンスでなくとも、ラッキーセブンには、応援席総立ちでうたう。

こうして、試合の勝ち負けは別にして、試合終了後はスタンドの学生は、全員起立で、相互に校歌、応援歌、エールの交換で総てを終わる。これらをすべて取り仕切るのは、応援団のリーダー部員たちである。

三　現応援歌

「あゝ　中央の若き日に」

現在うたわれている応援歌終行の、力力中央中央のところで、それぞれ間（ま）をいれて、力、ドドドン、力、ドドドン、中央、中央、と太鼓でやる。所謂、相の手である。ドドドンのところは、太鼓にあわせて、手拍子でパンパンパン（あるいはシャンシャンシャンというのか）とやる。太鼓のないときには、もちろん手拍子だけであるが、それでも結構盛り上がる。

あゝ中央の若き日に

中央大学学友会選定
古関裕而 作曲

力強く大きく ♩=112

あこがれたかく そらひろく

りそーの ひかり あやなせーる ーあ

あ ちゅうおう ーの わかーき ひに

でんーとう ほこーる はくーもんー の

たたかい いどむ はたあおげ ーちか

ら ちから ちゅうおう ちゅうおう

あゝ中央の若き日に

中央大学学友会選定
作曲 古関 裕而

憧れ高く 空ひろく
理想の光あやなせる
あゝ中央の若き日に
伝統誇る白門の
闘い挑む旗仰げ
力 力 中央 中央

情熱と力の若人が
精鋭こぞりふるいたつ
あゝ中央の若き日に
雄叫ぶ血汐紅は
闘魂たぎる火と燃える
力 力 中央 中央

我らが誇り覇者の歌
燦たり栄光我が生命
あゝ中央の若き日に
今ぞ座らん覇者の座に
いざ勝どきを揚げんかな
力 力 中央 中央

野球試合のために、応援歌はつくられたのであるが、今ではかならずしも野球試合のためだけではなく、他の対外試合でうたわれ、とくに箱根駅伝（正確には、東京箱根間往復大学駅伝競走）にはなくてはならない歌である。

そして、クラブ、サークルをはじめとしてコンパなどでも盛んにうたわれている。また、結婚披露宴などでも、新郎が、中大卒業生のときなどは、必ずといっていいほどうたわれている。

この行進曲風のテンポの歌は、気分が乗ってくれば来るほど、気合いが入れば入るほど、調子よくうたえるし、音程が少しぐらいずれたって、どうということはない、却って盛り上がる位のものである。応援歌というのはそういう歌なのかもしれない。

さて、この応援歌の発表会は、昭和二三年六月二一日に大講堂において行われたが、翌年、大ヒット曲「イオマンテの夜」をうたうこととなる日本コロムビアの伊藤久男が、張りのある声で、大講堂を揺るがし、たくましくうたいあげた。大講堂は超満員に膨れ上がり、応援団は、それにもまして力が入ったのである。

発表された新応援歌は、いままでの応援歌が、いかにもクラシック調であるという理由で新しい歌をのぞむ声が起り、学内一般公募が行われ、（このときの賞金は、千円であった）学生の応募詞のなかから山崎某君の作品を選んだが、この詞を大幅に、学友会が補作し選定するという経過をたどり、現詞となった。

この詞に古関裕而氏が曲をつけたのであるが、これは当時予科三年生であった鈴木努氏（昭和二七年卒・中央大学協議員）が、この有名な作曲家に懇請してできた曲である。

鈴木氏は、当時、予科の応援団長であり、これまでうたわれている応援歌に、なにか、勇ましさが不足しているように感じ、勇壮な響きをもつ応援歌を渇望していたのである。そうして、これを作曲するのは我が国の作曲者の中で、古関裕而氏をおいて、ほかにないとの確信のもと、この新歌詞を携えて、柿の木坂の古関宅を訪問することとなる。

それまで全く未知の人であり、初対面であったが、戦前戦後を通じてその作曲作品から、氏への人柄に好意を抱いていた鈴木氏は、熱意をもってこの応援歌の作曲を懇請したのである。

古関裕而氏は、昭和五年、山田耕作氏の勧めでコロムビア専属となり、以後、昭和史の足跡をたどるごとき曲を書きつづけている。戦時中には、「露営の歌」などの哀調を帯びた戦時歌謡を、大戦末期には、「予科練の歌」「ラバウル海軍航空隊」など、人の心を揺るがすような曲を書いている。戦後すぐには「夢淡き東京」をはじめ、ラジオ黄金時代には、連

続放送劇・鐘の鳴る丘の「トンガリ帽子」、などとつづき、昭和三九年の東京オリンピックには、「オリンピック・マーチ」で全国民の心を揺さぶった。大学の歌では、早大の応援歌「紺碧の空」がある。

平成元年八月十八日逝去　享年八十歳

古関裕而氏から作曲の快諾を得ての帰り道、鈴木氏の胸中には、「憧れ高く、空広く・・」の歌詞が大きく広がっていた。戦後間もない昭和二二年秋の夕暮であった。

発表時、日本コロムビアレコードから伊藤久男の歌唱による、SP版レコードが発売されたが、このときの題名は、「あゝ中央の若き日に」となっている。

この歌ができてから四十年余が経過した今、この「ああ、中央の若き日に」の題名がうすれ、中央大学応援歌との、題名でうたわれているのだが、もともとのこの題名をこそ、忘れないで貰いたいものである。

これは、全くの余談であるが、神宮球場において、昔何回かみたことがある東京農業大学の応援に、「きっと勝ちます、勝たせます」とうたう、大根おどりなる応援歌がある。大根二本を持っての振り付けが愉快なので「大根おどり」が題名のように思われているが、この歌には「青山ほとり」なる結構な題名があることを関係者以外あまり知られていないようである。これに、すこし似た環境になるか、わが応援歌も「あゝ　中央の若き日に」といういい題名があることを忘れてはなるまい。

四　旧応援歌「暫ひの殿堂」

先に述べたように、応援歌の歴史をたどれば、校歌1が、そのルーツとなるが、それはさて措くとして、現応援歌「あゝ　中央の若き日に」ができるまでは、対外試合の応援歌として「暫ひの殿堂」という題名の応援歌があり、うたわれていた。

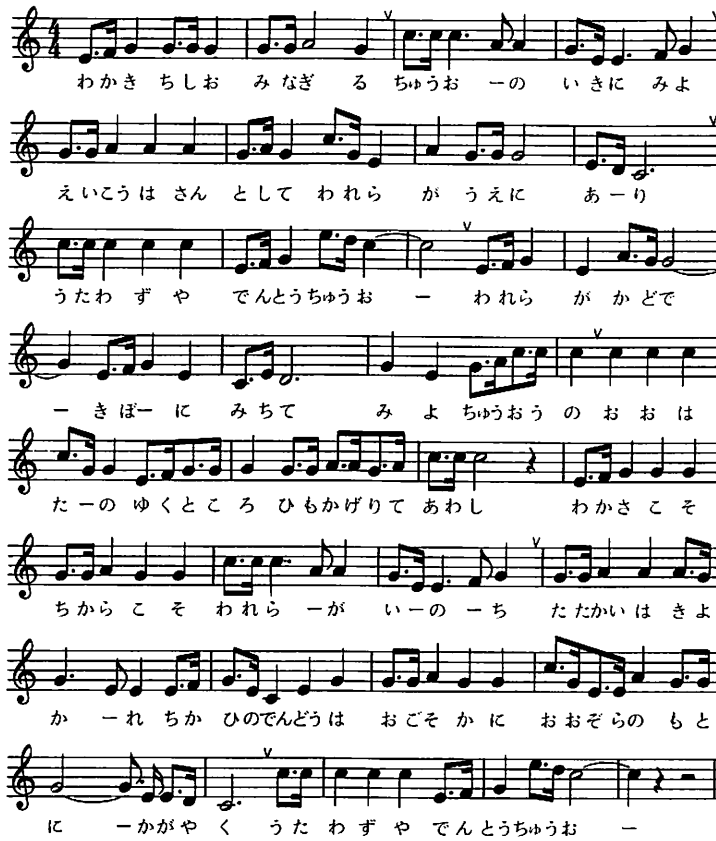
この歌は、旧応援歌として、いまでも知っている人もあるかと思うけれども、今から約五十年前に作られた歌である。

大学創立以来、（昭和六年まで）応援歌のなかった本学は、校歌のほかに応援歌を制定することとなり、「懸賞にて一般から募集、これに当選せる和田芳恵君作、応援歌歌詞は次のごとく、作曲は新進のピアニスト諸井三郎氏によってなされた。」　と当時の、記録が示すように、初めての応援歌が制定されたのである。

この歌詞が作られたときは、新興中央となっていたが（歌詞参照）、のちに、伝統中央とうたうようになってゆく。この歌が作られたとき、本学は創立すでに五十年を経ているので、新興という言葉はあたらないと考えるが、そのころの大

誓ひの殿堂

和田芳恵 作詞
諸井三郎 作曲
北澤 豊 採譜



誓ひの殿堂

和田芳恵 作詞
諸井三郎 作曲

若き血潮みなぎる
中央の意気にみよ
栄光は燦として我等が上にあり
謳はずや新興中央（※）

我等が首途希望に満ちて
みよ中央の大旆（はた）のゆくところ
陽もかげりてあはし
若さこそ力こそ我等が命

戦は潔かれ
誓ひの殿堂は厳かに
大空のもとにかがやく
謳はずや新興中央

（原文のまま）

（※この歌詞がつくられたときは、新興中央となっていたが、のちに、伝統中央とうたうようになってゆく。）

学スポーツ全般において、本学は新興であったと解することはできそうである。

「晢ひの殿堂」の題名は、今考えれば、いかにも古めかしく聞こえるが、「質実剛健」を校風として掲げていた本学としては、ぴったりのいい題名である。

この初めての応援歌の発表は、日比谷公会堂で行われ、翌昭和六年には、日本コロムビアからレコードとして発売されたということであるが、歌詞は、活字に残っているが、そのレコードも楽譜も残されていないのはまことに残念である。

「荘重にして優美、曲雅にして爽快、わが中大の面目を充分に発揮している」などの賛辞とともに登場したこの応援歌も、しかし、時移るとともに、クラシック調などといわれるようになり、ついに、新応援歌の登場となってゆくのも時代の推移というものなのであろうか。ちなみにこの時の懸賞金は二十円であった。

この「晢ひの殿堂」は、昭和二八年頃までは「野球応援歌」としてうたわれ、我々学生も、神宮球場でうたった記憶があるが、だんだんに今の応援歌におされて、特別の時以外はうたわれなくなってゆくのである。そこで、この歌が消えてしまいそうになるのを憂い、なんとかこの歌を残そうと願う人がいた。元応援団総務の長田孝禰氏（昭和二八卒）である。そして、長田氏が先輩から伝えきいてきたままを自らうたい、テープに採り、それをききながら、音楽研究会元監督の北澤豊氏（昭和二九卒）が採譜したのが、ここに掲げた楽譜である。

長田氏も先輩のうたうのを伝え聞いてきただけであるので、かならずしも正鵠を射ているとはいえないが……とのことだけれども、ともかく楽譜が出来上がったのである。

作詞者　作曲者

作詞した和田芳恵氏は、当時学生（昭和六年法学部卒）であったが卒業後作家活動に入り、本学出身で初の直木賞を受賞した人である。樋口一葉の研究者として知られ、昭和三一年「一葉日記」で日本芸術院賞、同三八年「塵の中」で直木賞、同五十年「接木の台」で読売文学賞、「暗い流れ」で日本文学大賞を受賞している。

学内教養雑誌「中央評論」にも多くの寄稿をされている。この中央評論が昭和四七年に「白門文芸特集号」を企画、刊行したのであるが、これが機縁で、中央大学文芸同好の士の集まりである「春秋の会」が、結成された。私は好運にも、その第一回の総会の時にその末席にあってお目にかかり、謦咳に接する機会を得たのであったが、温容そのままの物静かな方であり、文筆ひとすじに生きた人である。

昭和五二年十月五日逝去　享年七一歳

この詞に曲をつけた諸井三郎氏は、当時、新進のピアニストとして知られていたが、昭和七年渡独、ベルリン音楽大学で作曲を学び、卒業。帰朝後は、作曲に専念、音楽を純粋抽象芸術としてその形式の原理的追究、音楽理念の貫徹を目指した。昭和二一年には、文部省社会教育視学官、三十年から東京都交響楽団長、四十年からは洗足学園大学教授、音楽学部長をつとめた。

ドイツ・ロマン派の、我が国における代表的な理知的作曲家であり、門下生には、入野義朗、柴田南雄、戸田邦雄、團伊玖磨らがいることで知られている。

昭和五二年三月二四日逝去　享年七四歳

五　中大健児の歌

「あゝ中央の若き日に」の作曲を古関裕而氏に懇請した鈴木努氏は、応援歌はいくつあっても良いというのが持論であったが、新応援歌ができて五年、昭和二七年には、第三番目の応援歌ともいうべき新しい応援歌が誕生する。

「中大建児の歌」である。

この歌は、新しい中央大学学生歌として募集され、河尾俊雄氏（昭和三十年卒）が当選した。河尾氏は、当時学生（二年生）で、応援団に所属していたが、この、新学生歌歌詞募集に応募し、当選したのである。この歌は、当選者がたまたま応援団員であったということで評判にもなり、大いにうたわれることとなる。また、河尾氏は、受け取った賞金を、監督と相談し、福祉施設に全部寄附してしまったそうであるが、このことがまた美談的に取り扱われ、この歌の評判を高めた。

最近、河尾氏から当時の模様と原詞の提供を受け、一部誤り伝えられていた歌詞を訂正することができた。

応援歌は、勇壮活発なのが良いと言うことであれば、「暫ひの殿堂」より「あゝ　中央の若き日に」が良く、この「中大健児の歌」がさらに良いと思える。

ともあれ、本学の応援歌は、三つ有ることとなる。

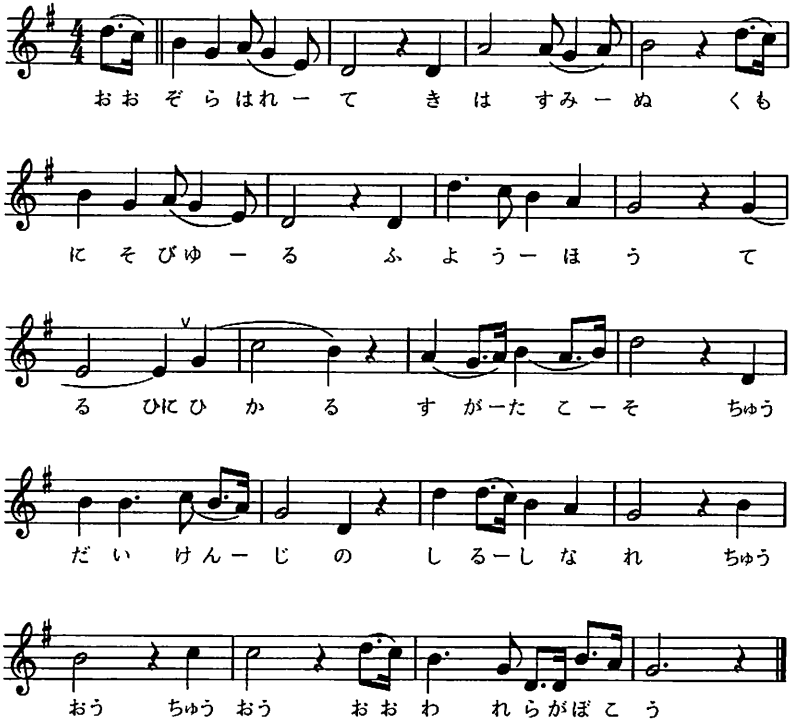
この歌の発表会は、「新応援歌」として、昭和二七年十一月二三日、白門祭の期間中の大講堂で行われているが、もともとの題名、中大健児の歌でうたい続けられ、現在に至るまで、中大生愛唱歌の一つとして大いにうたわれ、うたいつがれている。

この歌は、校歌などとともに、カセット・テープ「中央大学校歌」にも納められていて、応援部・チアリーディング部のメイン演舞の曲ともなっている。

当時は新応援歌として発表されたといわれているこの歌が、

中大健児の歌

河尾俊雄 作詞
鈴木大八郎 作曲



中大健児のうた

作詞 河尾 俊雄
作曲 鈴木大八郎

大空晴れて 気は澄みぬ
雲にそびゆる 芙蓉峰
照る日に光る 姿こそ
中大健児の表徴なれ
中央中央 おお我等が母校

伝統燦たる 旗の下
自由の世界 うち建てん
情熱と力を 示すこそ
中大健児の 心なれ
中央中央 おお我等が母校

正義頭に 胸に愛
栄ある歴史 受けつぎて
自由を常に 守るこそ
中大健児の 義務なれ
中央中央 おお我等が母校

自由と自尊の心もて
文化の流れ 汲み取りて
暁の鐘 告ぐるこそ
中大健児の 理想なれ
中央中央 おお我等が母校

最近まで久しい間作曲者不詳となっていて、いろいろ尋ね歩いたり、調べたりしていた。

そのころは、当時の音楽研究会のオーケストラ・メンバーであった鈴木大八郎氏であるらしいということだけで、史料不足から現時点では断言できないのが口惜しい……などと稿をまとめたものである。

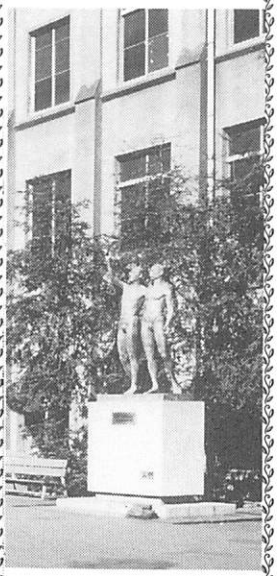
このことを、音楽研究会の大先輩二澤周治氏（昭和28年卒）にお訊ね相談したところ、鈴木大八郎氏が静岡市で音楽研究所を開設されていてご健在。同時にこの中大健児の歌の作曲者であることが平成二年八月になってわかった。

鈴木氏は、昭和三十年卒業で、音楽研究会の委員長を務めた人で、学生時代は、バイオリンの名手であったと伺っている。鈴木氏の話によれば、この歌を作曲した後、ブラスバンド用に編曲し、大講堂で、白門祭のおりなどに、ブラスバンドの演奏の指揮をなさったという。その他、合唱用、タンゴバンド用にも編曲したが、その時の楽譜は今は残っていないとのことである。

また、校歌「草のみどり」を混声合唱用に編曲もされているがこの楽譜は鈴木氏の手許に残されている。ともかく、長い間わからなかったこの歌の作曲者が判明したことは、筆者にとって殊のほか嬉しかったし、わが中央大学にとって悦ばしいことであった。

応援歌
初めてのレコード
（昭和25年）

学生歌と神田節など



中庭の青年像
昭和36年

一、学生歌

中央大学の中での学生歌とは、どういう定義をしてよいのか、少しの戸惑いをしながら稿を進めてゆくほかはないのだが、学生が作り、学生が歌い、学生の間に広まり、歌い継がれて来ている歌を学生歌というのであろうか。

とすれば「惜別の歌」や「伊豆逍遙歌」や「首途の歌」は、その範疇に入ることとなる。

そして、誰が作ったか判らない歌でも、学生の間にうたわれ、うたい継がれている歌もあるし、そして時代の移り変わりの中で、うたわれなくなってゆくうたもある。それらは、「書生節」「中大五万節」「中大神田節」などであるし、少し拡げて考えれば、「大学数え歌」などもそうであろう。

そして、さらに、中央大学が「学生歌」として募集した歌もある。

その一つは、「中大健児の歌」（昭和28年）である。しかしこの歌は、勇壮活発なメロディーのゆえか、学生歌というよりも第二応援歌としての性格が付与されているような具合で、現在の応援団チアーリーディング部では、この曲で華麗に演舞しているなど、今日まで大いにうたわれている。

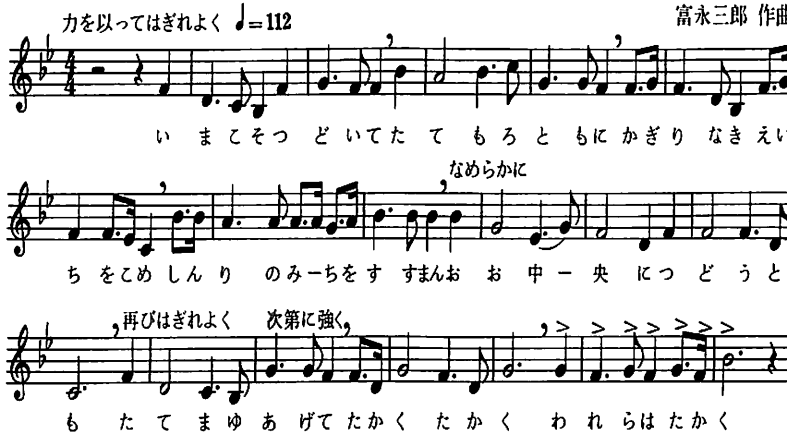
純粋に「学生歌」と称してよいのは、中央大学新聞が、昭和三三年六月二五日付新聞で、創刊500号を記念して「学生が、どこでも、いつでも明るく歌える歌詞を、三節以上」として募集した学生歌であろうかと思う。

同年十月一日締め切り、十一月五日、白門祭特集号で発表された。一席入選は、岡本明久（法二）作の歌詞となり、賞金は、一万円であった。

この歌詞に、当時学校放送番組の作曲を担当していた、富

中央大学学生歌

岡本明久 作詞
富永三郎 作曲



中央大学学生歌

作詞　岡本明久
作曲　富永三郎

一、今こそ集いて　起て　もろともに
限りなき　叡知をこめ
真理の道を　進まん
おゝ　中央に集う友
起て　眉あげて
高く　高く　われらは　高く

二、広く世界を　見よ　もろともに
新たなる　希望をこめ
平和の光を　満たさん
おゝ　中央に結ぶ友
見よ　眉あげて
高く　高く　われらは　高く

三、未来を見つめ　行け　もろともに
永久の　生命をこめ
理想の歴史を　築かん
おゝ　中央に誓う友
行け　眉あげて
高く　高く　われらは　高く

永三郎氏に作曲を依頼し、この年の白門祭に大講堂において発表会が行われたのである。

なお、佳作には、柴田甲之進（法四）、岩崎まさる（法三）、荒川重雄（法三）、が入選している。

しかしこの歌は、意外な運動へと展開してゆく。一席当選した作詞者の岡本明久氏が、その賞金を基金として学生生活のシンボルとなるような「中大の像」を作ろうと、募金運動を起こし、約三年をかけて、駿河台校舎中庭に、青年像を建設することとなる。

募金運動は、ドラム缶硬貨募金などをはじめとして、さまざまのキャンペーンが張られ、新聞に大きく採り上げられるなど、反響も大きく、昭和三六年十一月十八日、中大の像は、「青年像」として建設され、小雨けぶる中庭にて、除幕式を行うこととなる。像の銘を「蒼穹」と言う。

この青年像は、昭和五五年三月、文科系四学部の多摩校舎移転完了後、駿河台校舎の中庭から多摩校舎の段々池のほとりに移設されることとなる。

二人の青年が肩を組んでいるその青銅の雄姿は、いまや中央大学のシンボルとして、多摩校舎の中央、段々池の際に、天空を指さして立っている。

制作者は、彫刻家、本郷新氏で、「わだつみのこえ」（戦没学生記念像）など多くの作品を制作した人である。

台座の銘に曰く、「若人は語り合い、そして歩むことが好きだ」とある。

その後、昭和五七年十月に至り、この青年像のモデルとなっている青年が、中央大学附属高等学校陸上競技部の選手であったこともあり、同型のものが建造され、同校の正門を入って左手に立っている。

さて、この学生歌は、青年像が有名になったためかどうか、青年像の陰に隠れたような恰好となり、大講堂で「学生歌」発表会は行ったのであるが、その後あまりうたわれず今日に至っているようである。まことに申し訳ないが、私もうたったことがない。

二、中大神田節

どこからどう伝わって来たのか、生まれたのか、はっきりと知らないまま、ともかく、調子よくうたえる歌として、学生時代よくうたった。

一説によれば、むかし、といっても戦後のこと、全国相撲選手権大会の応援に行った応援団が、近畿大学のうたうこの歌を聞いてこれは良い歌だとして、中央大学に移入したと仄聞している。

また、この歌を中央大学がうたい始めたころ、日大から、これは近畿大の歌であり、わが日大は、近大と姉妹校である。

ゆえにこの歌をうたえるのは、関東ではわが校だけである、とかの申し入れがあったという話も伝わっている。

しかし、その歌詞といい、曲といい、まさにわが中大にぴったりである。移入してきた歌詞を応援団員の誰かが書き直しをしたのであろうか、大層筆の立つ人がいたものであると、感嘆するしかない。

それほど中央大学にぴったりなのである。

もっとも、中大健児の歌の作詞者河尾俊夫氏は、応援団員であったことからすれば、当時の応援団の中で、これくらいの事をするのは、朝飯前であったかもしれない。

ともかく、学生の会合で、一杯はいれば必ずとび出し、この歌が出なければ、その会は、終わらないというぐらいな歌である。

今ではコンパはごく普通の行事のようになっているが、筆者の学生時分は、酒の出る会は、納会とか、忘年会に限られていたから、この時は天下御免で、大騒ぎとなった。いわゆる無礼講であり、そういう会には、この神田節は、なくてはならない歌なのであった。

この歌の特長は、どんな歌い方をしてもよく、学生間に所謂、蛮カラの風習の残る調子であり、放歌高吟でき、伴奏はなくとも、手拍子と合の手で、皆で揃って歌えるし、少しぐらい音程がずれたとて、むしろその方が面白いというところにある。つまり、下手にうたった方が味が出るというような歌である。

もちろん楽譜は無い。

この神田節も、新学期における「歌唱指導会」には、紋付き、羽織袴姿の応援団長以下十数人が、大講堂の壇上に、ズラリと並び、手振りよろしく、歌いかつ、踊るのであった。この振り付けが、藤間流であるとも伝わっていることもあり、一層の興味がわいてくるのである。

校歌、応援歌、そのほかの歌にくらべ、この時ばかりは、はるかに大きな歓声と、拍手が、新入生から沸き起こり、歌唱指導会が終わって講堂を出てくる新入生の中には、早速覚えて、口ずさむ者さえいた。

中大　神田節

この歌の前口上なるものは、その集まりや雰囲気で多少変わるし、またその部の歴史や伝統によっていくぶん変わった言い替え等がおこなわれた詞になっている。ここでは、僭越ながら剣道部に伝わる前口上を、掲げさせて頂きました。

（前口上）

西に霊峰富士の高嶺を仰ぎ見
東に坂東太郎の清流を控える

この、大関東平野は大江戸の
神田の丘に位する　その名も高き白門の
中大名物数あれど　数々あれど数あれど
数ある中のその中で　中大一の良い男
見てくれ俺のこの躰
剣道で鍛えたこの躰　ア、ヨイショ

前から来い！　前から来る奴ァ諸手突き
後から来い！　後から来る奴ァ　胴一本
見てくれ俺のこの躰
剣道で鍛えたこの躰　ア、ヨイショ

中大名物数あれど　数々あれど数あれど
数ある中のその中で　その名も高き神田節
今日は○○の○○会　歌って踊って狂おうぜ
えっさコリャコリャこの俺は、　（一拍おいて）
（本唄）
ここはお江戸か　神田の町か
神田の町なら大学は中央　えっさ　こりゃ　それ
（くりかえす）

大学中央の学生さんは、

度胸一つの男伊達
度胸一つで神田の町を
歩いて行きます紋付き袴

紋付き袴は、中央の育ち
ぼろはおいらの旗印

ぼろをまとえど心は錦
どんなものにも怖れはしない

どんなものにも怖れはせぬが
可愛いあの娘にゃかなやせぬ

可愛いあの娘はいつでも捨てる
母校のためなら命までも

命捨ててもその名は残る
大学中央のその名は残る

おまけに俺いらのその名も残る
（2回繰り返す）

三、書生節のこと

戦前の歌である。いつごろであるかは、はっきりしない。推定でいえば、錦町校舎から駿河台校舎へ移転した大正十五年頃から、昭和二十年近くまでうたわれていたようである。

昭和十二、三年ころは、盛んにうたわれていたと、古い先輩から伺っている。

楽譜はない、口承の歌である。何かの替え歌であるかもしれない。

書生節　*

私ゃ好きだよ中央の書生さん　ヨイヨイ
稽古帰りのあの乱れ髪　エーイトエーイト
アリャリャンコリャリャントセー
（以下この掛け声を繰り返す）

月の七日はお薬師参り　ヨイヨイ
お薬師詣りでそなたを見染め　エーイト……

見染めただけでは恋すにゃならぬ　ヨイヨイ
恋すにならなきゃ文あげましょうか　エーイト……

惚れてみやがれただではすまぬ　ヨイヨイ
箪笥長持は空にして返す　エーイトエイト……

*昔は、学業を勉強する者を、「書生」と言った。今の学生のことである。

私は、何回か聞いているうちに、覚えてしまい、なんとかうたえるようになった経験を持つが、独特な手拍子と、振りがついていて、これを覚えるのがたいへんであった。

所謂、お座敷芸のようなもので、今では、この、のんびりした節回しの歌は、ほとんどうたわれなくなっているようである。

四、中大五万節

新入生の時、先ず先輩に教えられた歌である。

中大出てから十余年　（ヨイショ）
今じゃ神田のルンペンで　（ヨイショ）
真夏の太陽のその下で　（ヨイショ）
数える虱が五万匹　（ヨイショ）

中大出てから十余年
今じゃ女学校の先生で

桜の花咲く樹の下で
恋する乙女が五万人

この他、「無実の罪人五万人」とかいろいろに替えられてうたわれたがここでは、以下略。

この歌も、正調というのは無いに等しく、極端にいえば、うたう度に、少しづつ違っているようで、また、うたう人によっても違う。そこがまた面白い歌でもある。

勿論歌詞はあれども、楽譜は無い。うたう人それぞれが、自分が正調であると思ってうたうので世話は無い。現在の学生間で、この歌がうたわれているかどうかはよく判らないが、多摩校舎、理工学部校舎には、それぞれ桜広場があることだし、とくに、多摩校舎の広場は、桜咲く季節には、近隣地域市民にも「お花見会」に開放し、午後五時からは大いに盛り上がる。なかには、カラオケを持ち込んで、一大イベントにしているグループもある。

この中大出てから十余年……は、そんな中で歌われてもよいように思う。楽器伴奏などが無く、手拍子だけでけっこう盛り上がる。五万節とは、そういう歌である。

五、大学数え歌

一つとせ、で始まる我が国古来から有る数え歌に大学の名を読み込んで、それとなくその大学の特徴を歌い込んだ替え歌である。一節の終わり毎に、そいつあ豪気だねと「囃し」というか合の手を入れるので、「豪気節」ともいった。

今考えて見れば、ひどい歌である。自大学に身贔屓この上もなく、他大学の特徴を捉えつつ、コケにしている歌詞内容である。

どこの大学でもそうであるから、恨みっこなしのお互いさまであるが、なんとも子どもじみている。その歌を、大学生が得々と歌うのであるから、ますます子どもじみている。

そういえば、子どものころ、〇〇学校良い学校、××学校ぼろ学校などと自分の学校を良い学校とし、他校を悪い学校とけなし、囃し立てたことを思い出すが、これとあまり変わらないのではとも思う。

この歌は流行歌として、一時ヒットしたが、大学名を出すといろいろ支障があるのを憚ってか、大学生のところをン大生などとうたっていたのを思い出すが……。

一つトセ
人はみかけによらぬもの　〇〇上手な　ン大生
そいつぁ豪気だね

二つとせ以下は、記載が憚られる箇所が多いのでやめておきます。

中大は、だいたい五つトセ、いつも神田で叩き売り……であった。

同級生で、二十トセまで作ったのがいたが、勉強の出来る奴だった。よくもまあそこまでできたものだと感心していたが、今では、すっかり忘れてしまっている。

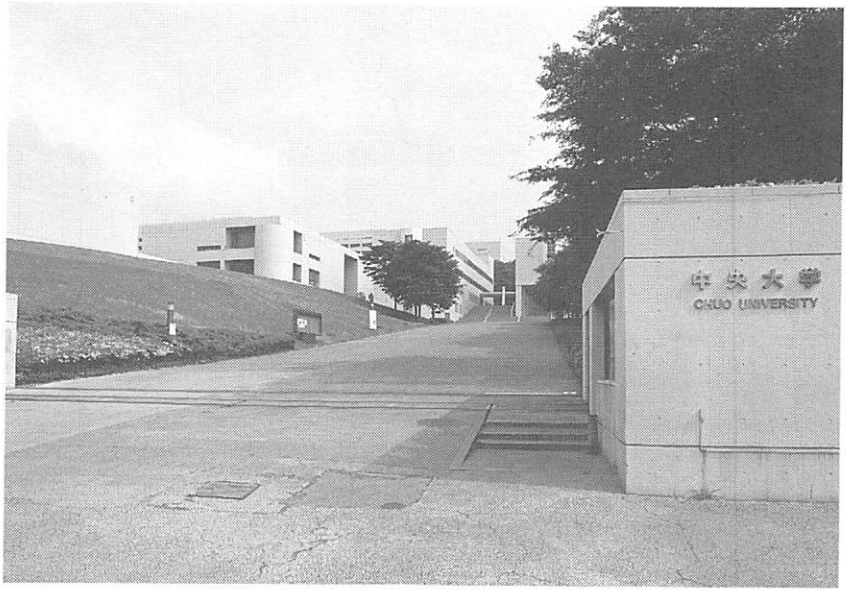
これも学生歌と言えばいえるうたである。

このほか、デカンショ節などもあったが、あまりうたわれてはいなかった。

六、キャンパスソング

中央大学創立百周年記念に募集した歌である。昭和五三（1978）年、校歌にあるように、自由の天地展けゆく観のある多摩校舎に移転開講した年、教職員学生を対象に、新天地に相応しい中央大学のキャンパスソングを募集した。

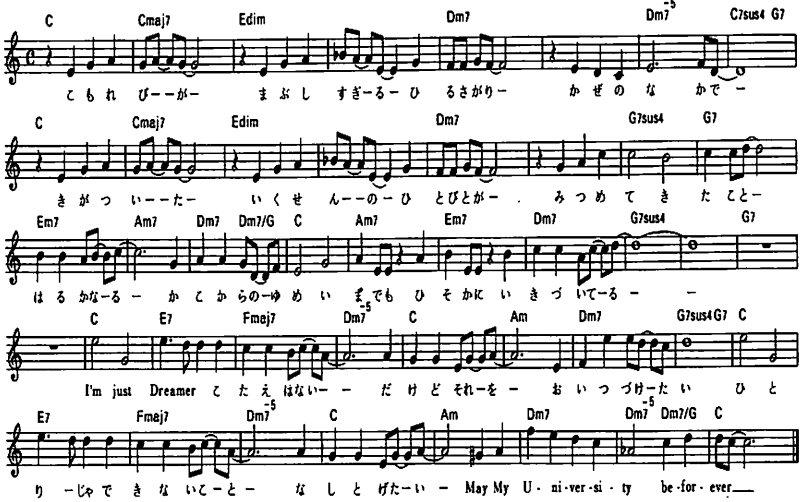
その応募作の中から金賞を射止めたのが「限りなき時代の流れ」であった。中央大学よ永遠にと謳うこの歌も、発表の時以来、全学に浸透してゆかなかったようである。



多摩校舎 正門

Dreamer ～限りない時代の流れに～

久保友継 作詞・作曲



木もれ日がまぶしすぎる昼下がり風の中で
気がついた　幾千の人々が　見つめて来たこと

はるかなる過去からの夢，今でもひそかに息づいている

I'm just Dreamer　答えはない　だけどそれを追いつづけたい
一人じゃできないこと　成し遂げたい　May My University be forever

過ぎし日の人々よ　何をつかんで来たのか
生まれ来る人々よ何を求めて行くのか

はるかなる未来への夢今こそ心に築きあげて

I'm just Dreamer　答えはない　だけどそれを追いつづけたい
一人じゃできないこと　成し遂げたい　May My University be forever

I'm just Dreamer　答えはない　だけどそれを追いつづけたい
一人じゃできないこと　成し遂げたい　May My University be forever
My University IS forever

予科の歌

首途の歌
送別の歌
建業の歌

一　首途（かどで）の歌

この歌を教えられたのは、私が学部一年の時であった。

駿河台の大講堂は金釦のピカピカ光る学生服の新入生で満員であった。正面の壇上には、大太鼓が据えられ、腕章をまいた応援団のお歴々が天井を睨むが如く腕組みをして仁王立ちに二十人ばかり堵列している。

いわゆる応援団による「歌唱指導会」である。ガリ版刷りの歌集が配られ、まず、校歌、応援歌、これが楽器伴奏なしの太鼓の音と、鍛え抜かれた応援団員の嗄れ声で、一節ずつの反復練習である。

約一時間、熱気むんむんの中で大声を出すのだから、もう皆くたくたになる。この歌唱指導の終わりに近く、中大健児の歌、そして首途の歌があった。

「この歌は、中央大学に長く伝わる寮歌でアール・・・新入生のお前たちの首途を祝う歌でアール・・・」の前置きがあって、大太鼓がドーンと鳴る。

豫科首途の歌

作詞・作曲　村上道太郎

若紫の根も強く
生（あ）れたちし子が夢さめて
東天はるか地の果てに
泉汲まんと出ずるなり
流転（るてん）の運命（さだめ）春は逝き

昭和17年頃
大講堂正面

人は老ゆれど何かせん
若き血潮の漲りて
只東と強うるなり

遮莫道遠く
凋落の野に野分け立ち
萬象既に凍るとも
などてひるまん吾が心

左手に弩弓は握らねど
ダビテの気概胸にあり
破邪邁進の気は立ちて
炎と燃ゆる瞳なり

白門城の朝ぼらけ
紫霞に黒白は分たねど
幕中計の既になり
猛き丈夫今ぞ立つ
（最後を三回繰り返す）

右の詩は、昭和二四年中央大学出版部刊の「学生の栞」から、できるだけ原文に忠実に掲げたものである。当時の栞に一部誤植があったがこれを、作詞・作曲者の村上道太郎氏に直接校閲を戴き、訂正することができたのであったが、その折、この歌は、予科の新入生の前途を祝い、勇気づけるために昭和十四年に作詞作曲したのであると、作詞作曲の動機をも、お伺いできたのは、幸運なことであった。

さて、応援団の歌唱指導は約一時間、大講堂の使用時間がきれて、漸く終わりとなる。新入生一同は、やれやれといった顔つきで、三々五々講堂を出て行くのである。

その当時は、うんざりといったところであったが、今となっては、良い思い出で、この歌唱指導会がなかったら、この歌などは、知らずに卒業してしまったかもしれない。

応援団が、大太鼓をゆっくり打ちながら、歌唱指導した時代が懐かしく思い出される歌である。

その後何回か聞く機会があったが、うたう機会は少なかった。その後大学の冊子などにも登載されることもなく、少しずつ忘れられて行くようであった。

二　寮歌として

作詞・作曲した村上さんは、かつて「青春の残映」と題し、伊豆逍遥歌を中心に据えて、往時を回想する随想を中央評論に寄稿されているが、その中で、この首途の歌は、もうすで

に忘れられているのではないかと述べられている。

しかし、この歌は生きて現在に続いてうたわれているのである。例えば、かつては、学生部主催の、夏期合宿セミナーなどでは、大学に残る歌として歌集に入れ、歌唱指導をしていたことを仄聞している。

また、楽譜が無いため、うたい継いでゆくにしたがって少しずつ音程、というより節回しが変わったりしているが、かつて、応援団の歌唱指導が続いているころは、これが正調だとばかり、太鼓の音と共にあった。また、体育部関係などでは現在でもうたい継がれているとも聞く。

この首途の歌は、伊豆逍遙歌の稿で述べているように中央大学予科の「文研」を基点とする一連の所謂「寮歌」である。この歌には、まさに寮歌調という雰囲気があり青春の息吹を高らかにうたい上げている調子がある。第五番の、白門城の朝ぼらけ、などという詞句は、青春でなければ出てこない、若さあふれる詞句であろう。

ただ、惜しいことに、この歌の楽譜は残されていない。

村上さんを訪問した折、このことについて、必ず楽譜を書いて送るからと言われていたが、それをはたされることなく故人となられたのはまことに惜しい。

しかし、楽譜が無くともうたい継がれている歌はほかにいくらでもある。

だいたいにおいて、寮歌調の歌は、少しぐらい音程が狂ったところで、いわゆる放歌高吟の類の歌だから、正確でない方がかえって人間性が滲み出て面白く受け止められたりするものでもあろう。

いまやこの歌は、正確にうたえる人は、いるかどうかもわからないが、この歌を残すためには、やはり、よく知っている人にうたっていただき、テープに採り、そこから採譜するしか方法が無いが、今はその時間がない。いずれはそうしたいものである。

＊この首途の歌について、「昔から、お茶の水女子大付属高校の歌であり、中央大学の歌ではないので、本学の歌としてうたうのはまずい」と思う。というようなご指摘を戴いた。同校へ問い合わせたところ、現在は勿論、卒業生の会でも、この歌は知らないとの返事を戴いた。

この歌は、中央大学予科の歌として作詞・作曲者がはっきりしており、かつて、筆者は、作詞作曲者に面談して確認していることでもあるので、まさかと思ってはいたが、これで、安心できたのである。

三　送別の歌と建業の歌

村上さんは、この他にも「送別の歌」「建業の歌」を作詞作曲されている。送別の歌は、予科の卒業生を送るために作

られた歌で、新入生に対しての「首途の歌」に対比して作られたのであるが、これは、文研内部に限られてうたわれたようであり、私もまったく知らない歌であるけれども、うたわれていたことは事実であるので歌詞と楽譜をここに載せることとします。（ただし、建業の歌の楽譜は残っていない）

建業の歌

作詞・作曲　村上道太郎

一、顧みすれば建業の
理想は遠くうづもれて
有髪の胸に花咲かぬ
春を迎えて幾歳ぞ

二、人の眠りのまどかなる
紫の野の暁に
われ再びす駒並みて
行かん闘う時はきぬ

三、わが引く弓の聖天は
偉業にもゆるわが胸の
熱き血潮を伝うれば
いざや誰なと受け給え

四、八幡護れ梓弓
春陽いざよう湯島丘
戎装（じゅうそう）すでになりぬれば
今こそ挙げむ文研旗

五、若草野辺に萌えいでて
われらが偉業成らむ日ぞ
胸打ち開きわが友よ
文化の美酒酌（うまざけ）まむ哉

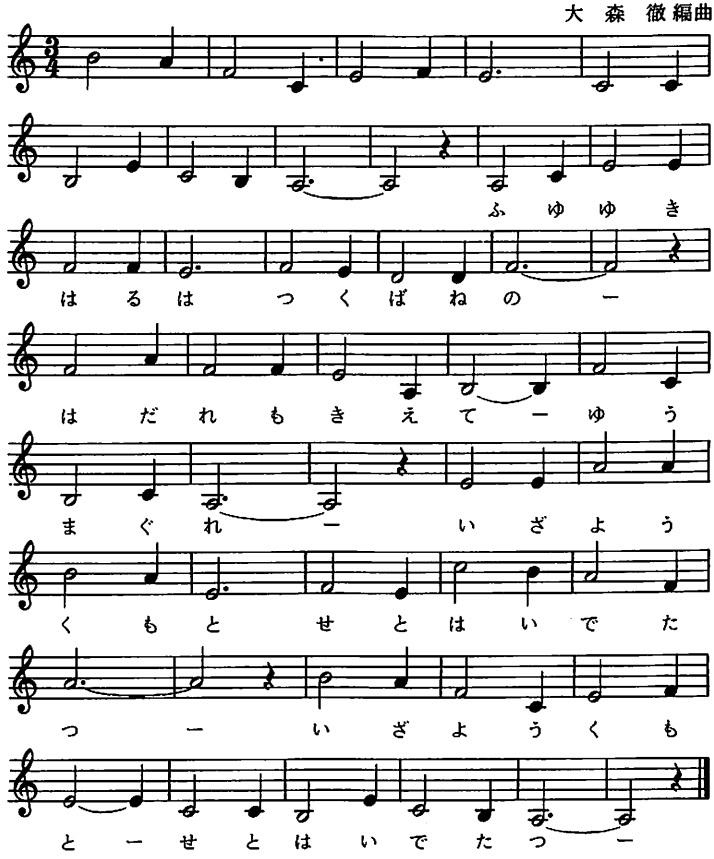
建業の歌も送別の歌と同様に、文研内部ではうたわれたが、一般には流布しなかったようである。しかし、鈴木努氏によれば、「予科では、入学の時には首途の歌をうたい新入生を励まし、卒業の時には、送別の歌をうたったものでした」と回想されている。

この二つの歌は、時代背景の異なる今ではほとんどうたわれていない。いずれにしても、古き時代の、青春の佳き歌であることには相違ないであろう。

＊お断り・此の稿については、文研誌「蘭交」を一部参照しました。

送別の歌

村上道太郎　詞
大森　徹　曲
編曲



送別の歌

作詞・作曲　村上道太郎

一、冬逝き春は筑波嶺の
斑雪(はだれ)も消えて夕まぐれ
いざよう雲と兄人(せと)はいで立つ
（くりかえし）

二、ああ落日の幽けさに
離別の涙しげくして
ただすべもなく時をうらみぬ
（くりかえし）

三、さあれなごりの一時を
友よ火を燃せ命こめ
未皖(すえ)安かれと歌い送らむ
（くりかえし）

伊豆逍遙歌の周辺

昭和十五年〜

（一）寮歌という思い

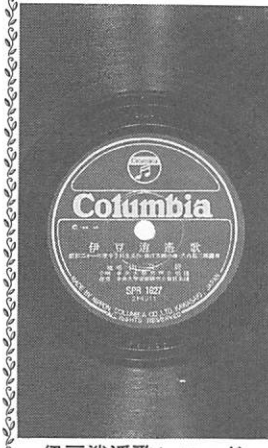
本学学生歌のうち、伊豆逍遥歌と惜別の歌はその双璧であろうと思っている。伊豆逍遥歌は、昭和十五年四月に、惜別の歌は昭和二十年三月、今次大戦の末期に、どちらも中央大学を土壌に生まれた歌である。そして、戦後になって予科生の間で広くうたわれ、それが、「寮歌」としてうたいつがれ、広まり、さらに今日まで親しまれ、うたわれているのである。

突然ながらここに「寮歌」という語が出てくるのには次のような考え方が潜在していると筆者は考える。

旧学制（昭和二十四年以前）で大学予科は、大学学部へ進むための学校として私立の大学に設置され、官立（現国公立）の高等学校に比肩される。この、予科又は高等学校に進学するには、旧制中学校（五年制）を卒業してからで、入学すれば三年間、年令的には十七歳から二十歳位までの育ち盛りの多感な青春期をすごすこととなる。昭和二十年ちかく、戦時の国策により、中等学校（旧制中学校、高等女学校など）などでは四年で繰上卒業などが行われたこともあり、このため四年生卒業で入学した者もあった。大学の繰り上げ卒業は、まず昭和十六年に三ヶ月の繰上があり、ついで翌年には六ヶ月の繰り上げなどがあり学徒出陣につながっていった。

それらはともかく、旧制高等学校は、全寮制であり、学業生活とともに、寝食を伴う合宿共同生活が三年間であった。青春時代、とくに少年から成人への脱皮の時期にこのような寮生活を過ごすことは、友情を育て、相互の融和、親睦を深め、切磋琢磨の場でもあったのである。

このような寮生活の中から自ずから、卒業などを契機として、自分たちの独自の歌を作る習慣のようなことがそれぞれ



伊豆逍遥歌レコード

の高等学校の寮で起こり、寮歌と称せられ、青春時代の親睦、融和、団結の象徴としてうたい継がれてゆくようになってゆくのであった。有名な歌には、「ああ　玉杯に花うけて」「春爛漫の花の色」は、いずれも旧一高寮歌、「琵琶湖周航の歌」（我は湖の子　さすらいの……）、「逍遥の歌」（紅もゆる岡の花さみどり匂う吉田山……）は、いずれも旧三高寮歌、「都ぞ弥生の　雲紫に……」北大寮歌などがある。

本学に全寮制はなかったが、こうした社会背景とともに、高等学校生と比肩される予科生には、予科で作られた歌には、寮歌に相当するという考え－思い－があったのであろうし、伊豆逍遥歌も惜別の歌も予科生が作詞作曲していることから、そして、おもに予科生中心にうたわれたこともあって、寮歌としての思いが込められていったのではないかと思われる。また、伊豆逍遥歌も惜別の歌もいわゆる寮歌調の歌詞であるとともにメロディー（ワルツ）もそうであったことにも、よるであろう。

現応援歌－憧れ高く　空ひろく……の作曲懇請に、単身、作曲家古関裕而氏を訪問した当時の予科生、鈴木努氏（昭和二十七年卒・現中央大学学員会協議員）は、当時の「予科寮歌集」を示しながら「我々予科生は、昼休みになると、専門部の各教室へ押し掛けて行って寮歌をうたったものでした。予科生は、新入生が入ると首途の歌をうたい、去り別れゆく友には惜別の歌をうたったものでした」と、これらの歌を寮歌と言い、弊衣破帽、蛮カラの風習の残っていた時代を回想されている。

ともかく、伊豆逍遥歌、惜別の歌、そして首途の歌など、予科で生れた歌は「寮歌」としてうたわれていたのである。

ついでながら、ここに初めて出てきた専門部というのは、大学学部とは別の学制で、また、予科とは別に、中学校（旧制）卒業で入学することができる、大学が付置する専門学校である。即ち、予科生と専門部生とは同年令層であったことからも共通感情が得られたのであろうか。

専門部は三年制で、卒業後は、学部へ進学する者が多かった。したがってこの頃の本学には、予科、専門部、大学学部の三つの学校が存在したことになる。専門部には昭和十九年に至り、従前からの、法科、経済科、商科に加え、工業の専門部が設立されたが、これは、中央工業専門学校と称された。現在の理工学部の前身である。

（二）文研と薗交会のこと

伊豆逍遥歌が作詞作曲された当時（昭和十五年）、予科に、予科生を中心に白門文化研究会、略して「文研」が誕生し、二年目を迎えていた。「中大予科には、個々的な同好会はあったとしても、人生を語り、真理を探究する文化活動は、

あまり活発ではなかった。一年二年と索漠たる生活を送った我々も、最後の一年を充実した生活であることを望むこと切なるものがあった。この同憂の士は自ら相求め、相集うこととなり、有志を糾合し、白門文化研究会を設立することとなった。」と、文研設立の趣意書にはある。

昭和十三年のことである。この会の設立は、わが国が軍国主義に傾斜し、集会結社の自由が奪われつつあったこの時代に、青春の自治と自由を求め、学生の間から自発的に盛り上がったところにその意義がある。

この文研から巣立って行った人達はまことに多士済済であるが、ここでは省略とします。

文研の活動は、二年目にして学術研究会、略して「学研」と名称を変えたりするが、昭和十九年に至り、戦時逼迫の折柄、学徒動員、あるいは学徒出陣などで会の活動が停滞し、事実上は活動休止の状況からついに解散となる。

しかし戦後復活し、この伝統は受け継がれ予科閉校まで連綿と続いたのである。そして、現在では、これらOBたちが集い、親睦会としてあるいはまた同窓会として「蘭交会」と銘打つ会が続けられ、中央大学創立百周年には記念号として二百ページを超える「蘭交」という立派な本を出版している。

伊豆逍遥歌の作詞作曲者である村上道太郎氏は、文研設立二年目、委員長に推されるが、この時予科三年生、昭和十四年のことである。

文研の中では、文学、歴史、哲学などの各般に亘り研究会や討論会、また各種の講演会が活発に催されていたが、とくに、村上さんが委員長になった年からは、文学を中心に、この会の活動は、文学色が濃くなってゆくようであった。

そのころ、予科生の間で、広く読まれていた川端康成の「伊豆の踊り子」に深く感動し、憧れ、その跡を追って、卒業記念に伊豆を歩こうということになってゆくのである。

大学では軍事教練が必須科目となり、社会ではパーマネント禁止などそして思想弾圧の嵐が吹きまくり、軍国主義、戦時一色に傾斜してゆく時代であった。

そのような時代に、青春の自由と自治を求めて設立された予科文研生の覇気を感得できる。

そしてそのまま、その自由を求める一つの証ともいうべき卒業記念の旅をしようという青春の発露に共感できる。むしろ、感銘をさえ覚えるのである。この卒業記念の旅も、只今では、卒業記念旅行と称して当然の如くに旅行社などがツアーを組んで国内は申すに及ばず海外まで出かけるようなことになっているが、この時代には到底考えられない社会情勢であり、現在とは、比較すべくもなく、全く隔世の感がある。

（三）伊豆の旅と伊豆逍遥歌

春休み、後は卒業を待つばかりとなった予科文研生たちは、皆一様に学生服で下駄ばきにマント、学生帽を被り、腰に手拭という、いわゆる蛮カラ風俗のいでたちであった。これは、当時の旧制高等学校生徒のコスチュームであり、中央大学予科生も同様であった。東京駅から東海道線で三島へ、三島から修善寺電鉄（今は伊豆箱根鉄道という）で、修善寺へ。

そこからは、下駄ばきマント姿の予科生の自由闊達の、そして青春を謳歌するその中に、同年輩の淡い恋物語が共感を呼んだのであろうか、その踊り子の幻影を求めて少しばかりの感傷を含んでの旅である。修善寺から下田までを徒歩旅行する、いわゆる「踊り子街道」の踏破である。

現在では、道路は舗装され、観光バスは毎日走り、河津七滝にはループ橋が建設され、観光地としての賑わいを見せているが、そのころの道路事情は現在とは比べものにならない土埃の舞う砂利道を、予科生たちは朴歯下駄を鳴らし、マント姿で闊歩して行ったのである。

修善寺から矢熊まで五・五キロ

湯ヶ島まで五キロ

この辺りで一日目は日暮れとなり一泊する。その日何という旅館に泊まったかの覚えは、今となってはさだかではない、と村上さんは仰言る。

そして翌日、天城峠まで九キロ、トンネルまで四キロ、湯ヶ野まで九キロ、ここでまた一泊。

翌日、箕作まで十二キロ、下田まで七キロ、合計で約五〇キロとなる。

「それは、無限の感傷を胸一杯にこめた若人の旅であった。だれからも監視されず、悲しいまでの自由が花を開いていた」と当時を偲んで村上さんは言う。なんにせよ下駄っぱきマント姿でときに放歌高吟しながらのぶらぶら歩きであるから、これだけ踏破するのに、三泊四日もかかっている。この踊り子街道の徒歩旅行で、予科生が見たものは、何であったのだろうか。「伊豆の踊り子」の幻想を捉えることができたのであろうか。その歌詞の四番からは夢破れた儚さのようなものを感ずる。そして、伊豆逍遥歌の歌詞だけで見ると、旅は、下田で終わっているようにうけとれるが、この時の旅行は、本当は下田で終わってはいない。下田についた面々は、若さにまかせて伊豆大島へと渡るのである。

この時の文研の記録に、旅は五泊六日となっているのは、この大島行が加わるのでそうなるのであると、後になって改めて知ることとなる。

大島では、大いに若さを発散させ帰りの旅費がなくなり、大いに困るのであったが、その話柄は、この稿の趣旨とはず

れるので、ここでは省略といたします。この旅行を初めとして、文研では毎年コースを変えたりして、文研の卒業記念として伊豆旅行を行っていることが記録として残されている。

（四）伊豆逍遥歌の作詞作曲

村上さんは、伊豆の旅から帰ると、早速に伊豆逍遥歌七聯を書き上げ、ついで作曲した。

作曲は、ギターによってである。

歌は、当然の如く文研の内部でうたわれ、そして予科生の間に広まり伝わっていった。そして「文研の歌」は「中央大学の歌」となっていったのである。この歌詞には、今日に至るまで作詞者の知らないところでいろいろに作りかえられた形跡がある。

これは先に述べたように、文研が毎年恒例として卒業記念に伊豆旅行を行い、その都度コースを変えたりしているので、その時々に生まれた詩などを挿入したり、入れ換えたりして、その時々にうたわれたのではないかと考えられるフシがある。

たとえば、ここに、昭和二十四年の中央大学出版部刊の「学生の栞」がある。これによると、伊豆逍遥歌の二番に、

富士の姿の影とめて
波間に浮かぶ淡島の
沖の鷗に夢路とめ
漁火ゆるる三津の浜

というのがあり、私の学生時代にはこの歌につられるように、同級生四十人と伊豆に一泊旅行し、大いに盛り上がってこの歌をうたった記憶が鮮明に残っている。その当時、伊豆逍遥歌のできた経緯などを知っていれば、右の「富士の姿の」の詞のなかにみる、淡島や三津浜の景は、踊り子街道にはないのだから、これは変だと思ったかもしれないが、その時点、昭和三十年ころの学生たちは、そのような事情は全く知らないでこの西伊豆の叙景をうたっていたのである。

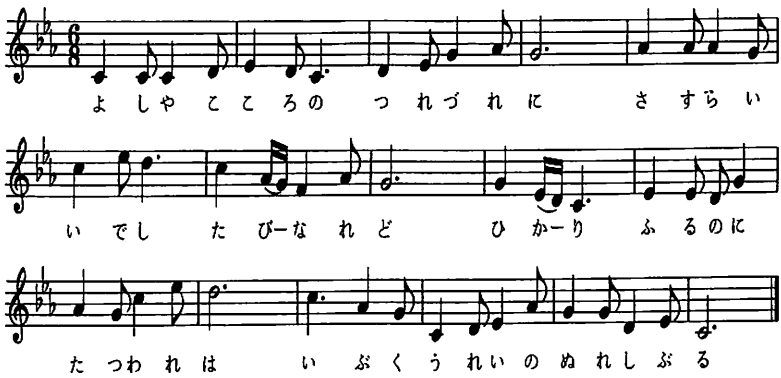
現在中央大学出版部で販売されているカセットテープ「中央大学の歌」の中の伊豆逍遥歌に収録されているのは三番までだが、そのうち二番は右の詞である。

この歌のミステリーめいたことは、なお続き、作詞者も、予科生共同作詞、作曲とか、藤江英輔氏（惜別の歌作曲者）が作曲者であるとか、刊行された歌詞集によって食い違いがあった。

とくに、初めてこの歌がコロンビヤからレコード化された時、それは、78回転ＳＰ盤の惜別の歌のＢ面に、入ったのであるが、なぜそうなったかわからないが、そのラベルには、昭和二十一年予科生共作、藤江英輔作曲、大内福三郎編曲、独唱山口毅、合唱中央大学男声合唱団、伴奏中央大学音楽研

伊豆逍遙歌

作詞
作曲　村上道太郎



伊豆逍遥歌

詞・曲　村上道太郎

一
よしや心のつれづれに
さすらい出し旅なれど
光降る野に立つ我の
いぶく憂いのぬれしぶる

二
ああ修善寺の春しづか
ことよもなげに梅散るを
のみの音たえて夜叉王の
魂いづくにか宿るらん

三
せせらぎ歌う湯ヶ島の
いで湯の里の月おぼろ
打つや太鼓の音につれて
灯影に舞うは誰が影ぞ

四
花かんざしの踊り子の
あえかな姿今なくも
この夕暮れに耐えずして
湯が野の里に歌うなり

五
天城峠に雲流れ
いがくり煙る陽のるつぼ
ゆくか旅人ぬかさめの
玉なす松の葉がくりを

六
杜に緑は深けれど
旅行く道に咲く花の
その花片の色ぞ濃き
その紅を如何にせん

七
丹塗りの駕籠の今さびて
春の陽わびし了泉寺
ここはいづこと問う我に
あやし下田と応う声

究会管弦楽団となっている。昭和二十一年予科生共作はまあ我慢できるとしても、藤江英輔作曲は、この歌が作曲された時に藤江さんは入学していないのだから、これはもう明らかに間違いなのであった。

これらのことは、のち、ソノシートやEP盤レコード、カセットテープに収録されてゆく過程で少しずつ補正されていった形跡を留めている。

これらについて、真の作詞作曲者である村上さんの指摘により、特に歌詞について、昭和六十年二月七日、学校法人に正式に訂正申し出があり、昭和六十年四月一日付の中央大学広報728号で、正式に訂正が報じられ、漸く、現歌詞に落着いたものである。

この伊豆逍遥歌が作られてから五十余年の星霜が流れた。この間の歳月は、第二次世界大戦を初めとして、まさに激動激変の時代であった。

しかし、中央大学がこの激変期をくぐり抜けてきたように、潰えること無くこの伊豆逍遥歌も学生と共にこの激動期を生き続けた。それは、この歌にそれだけの生命が具わっていたからであろう。そうして、今日の中央大学の愛唱歌として歌い継がれていることは、実に喜ばしい歴史であり、伝統であると思うのである。私も卒業して四十年、時としてふと立ち止まって学生時代を顧みる時、青春回想への軌跡として、この伊豆逍遥歌は心の隅から大きく広がり始め、口を衝いて歌となるのである。

（五）村上道太郎氏のプロフィール

村上さんは、在学中伊豆逍遥歌の他に、首途の歌、建業の歌、送別の歌を作詞作曲されている。

かつて、お訪ねしたアトリエで、「伊豆逍遥歌を作られたので、その思いのようなこともあって、伊豆に住まわれることになったのですか」との愚問に、「いやーそんなことはないよ」と笑っておられた。

いつも穏やかで、温顔にはにかみの微笑を湛えられ、ゆっくりした語り口でしたが、話柄が核心に触れると、眼鏡の奥で目がきらりと光り、口調が改まるのでした。

その村上さんが、平成四年一月二十七日、突如として黄泉の客となられた。享年七十一歳。

二月八日高野山東京別院にて本葬が営なまれた。当日参席の中央大学（予科文研）卒業生の蘭交会員により、仏前にてこの伊豆逍遥歌が合唱され、送別の歌となりました。私も同席しうたいながら、涙の溢れくるのを禁じ得ませんでした。

この稿を時空を超えて、作詞作曲者村上道太郎先輩の御霊に捧げたい。

惜別の歌

なぜ中央大学で
うたわれ続けて
きたのか

昭和二十年〜

女子学生から渡された一片の詩

惜別の歌が作曲されたのは、昭和二十年三月で、作曲したのは、当時中央大学予科一年生の藤江英輔氏である。

藤江さんは、太平洋戦争の末期、東京板橋にある陸軍造兵廠第三工場に、学徒・勤労動員で働いていた。そして、日増しに切迫してくる戦況の中、動員学生の中から、昨日一人、今日二人というように、召集令状により、戦場へ赴かねばならぬ学生が増えてゆくという環境に置かれていた。

毎日が戦々兢々の別れの連続であった。そのような日々に、同じ工場に働いていた東京女子高等師範学校（現お茶の水女子大学）の学生の一人から、一片の詩を手渡される。紙片に書いてあった詩は、島崎藤村の処女詩集＝若菜集＝にある「高楼」であった。この詩は、嫁ぎゆく姉とその妹の対詠形式がとられている次のような詩である。

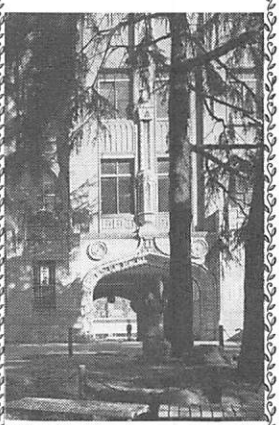
高楼（タカドノ）

わかれゆくひとををしむと
こよひよりとほきゆめちに
われやまとはん

妹

とほきわかれに　たへかねて
このたかどのに　のぼるかな
かなしむなかれ　わがあねよ
たびのころもを　ととのへよ

姉



駿河台校舎
旧玄関

わかれといへば　むかしより
このひとのよの　つねなるを
ながるるみづを　ながむれば
ゆめはづかしき　なみだかな

（原文のまま・以下略）

藤江さんはこの詩を見せられて、現実の日々の別れにあまりにも響き合う、ぴったりの表現であると思い、胸裏に走る電流のごときものを感じたそうである。

そうだ、この詩に曲を付けてみよう、そして皆でうたえたならと思うのであった。

とくに、この詩の第一連、旅の衣を整えよ、には原詩の作られた素因や動機を離れ、昭和二十年春未だ浅き二月、戦場に赴かなければならぬ若き学徒の旅の衣＝それは戎衣＝として、藤江さんの心を激しく打つのであった。

作曲に至るまでの憂悶、それは無言の別れを、無言のままに済ませてしまう物足りなさと、どうにも我慢のならない焦燥と煩悶が胸中に音を立てているのであった。

戦時下の極限状態といってよい環境の中で、昨日一人、今日一人という具合に召集されてゆく同級生を送るには、この歌しか無いと思うようになってゆくのであった。

そして、藤江さんは、作曲するに当たり、かなしむなかれわがあねよ、の箇所を我が友よ、と言い換え（または読み替え）、「高楼」の題名を「惜別の歌」とした。

自分にも、好むと好まざるとにかかわらず、何時やって来るか判らない召集令状、暗黒の青春の未来の中での焦燥と煩悶が、藤江さんの身辺を包みこみ、渦巻いているのであった。

そうした中で、曲は、終連の、旅の衣を整えよ／の部分から作られてゆき、死と隣り合わせているような、せっぱつまった状態から、心は不思議に澄んでゆき、旋律は、つぎつぎに、ひとりでに浮かんでくるように、唇をついて生まれた。

出来上がった曲は、早速にこの軍需工場での、出征する同級生へのはなむけとしてうたいかけられ、今まで無言の別れであったことから、歌を添えての送別となるのであった。

ここで働いている学徒は、中大生のほかは、女子学生と中学生（旧制）であったから、送られるのは中大生にきまっていた。送る人は、同じ工場で働く中大同級生、お茶の水女子大生、中学生（旧制）らであり、再び還れぬであろうことを予期しつつ、去り行く中大生に、一同、断腸の思いでこの歌を合唱したという。

昭和二十年八月、作曲者である藤江さんにも、ついに、召集令状が来る。

今まで同級生との送別に、うたう側にいた藤江さんが今度はこの歌を送られる番となったのである。

めくるめくる複雑な心境でこの歌をきき、そしてうたい、静岡県三方ヶ原陸軍航空隊に入隊することとなるのであった。

昭和二十年八月十五日終戦となり、藤江さんは、九死に一生を得る。戦争が終わって出陣したまま、学園に還らぬ学徒兵も多かったが、こうして「惜別の歌」は中央大学の歌として残ることとなる。

予科生の青春　寮歌という思い

この歌が大学に残ることとなるのは、それなりの理由や要素が、既述の他にこの歌にはあった。その一つは、「寮歌」という思いであり、もう一つは予科生のもつ純粋さと凝縮された青春の残照であった。当時の予科には、すでに「伊豆逍遥歌」という青春を謳歌する歌があったが、これは、送別の時にうたう歌ではなかった。

戦前の大学予科は、学制として高等学校（旧制）と比肩されていた。旧制の高等学校においては、各学校に寮があり、多くの生徒が寮生として起居を共にしていた。そうして卒業や進級や、また、寮祭などの時にその歌を作りうたうことが、一つの習慣の如くに繰り返されていた。

それらのうちで有名になった寮歌には「ああ玉杯に花うけて」「春爛漫の花の色」（一高）とか、「我は湖の子さすらいの」琵琶湖周航の歌、「紅もゆる岡の花」（三高）などがあり、現今でも親しまれうたわれている。

中央大学予科には全寮制はなかったが、同年代の旧制高等学校生との共通感情のようなものが予科生の心のうちにはあった。これら同時代の影響もあり、予科生が作詞・作曲し、皆でうたう当時の習慣のごときものがあった。

この一つの表れが「伊豆逍遥歌」であろう。

「惜別の歌」は、戦時中に生まれた曲であったが、述べたような背景をも持って生まれた歌なのである。

その曲と調子と内容が時代に即応していたとも言えるが、当然の情緒として、自分達の歌「寮歌」という情感の中で受けとめられていったのであろう。

戦後になっても、このような環境と条件と背景はそんなに急激には変化することなく、また、予科という学制も昭和二十四年までそのまま残っていたということもあり、また学徒動員の予科生、この歌に送られていったであろう学徒出陣の学生達も、大学へ戻って来たのである。

このような事情から、学生達は、予科から学部生へと進み、この歌は、全学生の歌となってゆくのであった。

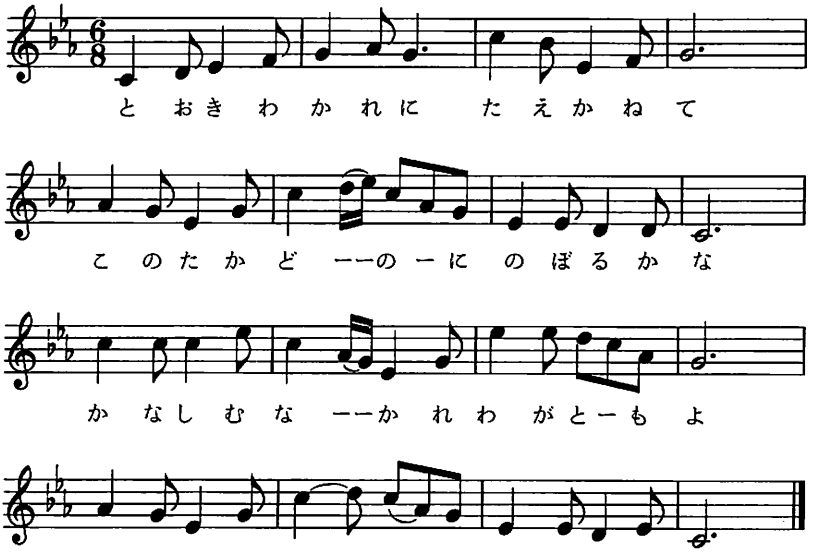
◎レコード化

歌声喫茶などで大衆に浸透

戦後になって、昭和二十六年、中央大学音楽研究会グリー

惜別の歌

島崎藤村 作詞
藤江英輔 作曲



惜別の歌

遠き別れに耐えかねて
この高楼にのぼるかな
悲しむなかれわが友よ
旅の衣を整えよ

別れといえば昔より
この人の世の常なるを
流るる水を眺むれば
夢はずかしき涙かな

君がさやけき目の色も
君くれないの唇も
君がみどりの黒髪も
またいつか見んこの別れ

君のゆくべき山川は
落つる涙にみえわかず
袖の時雨の冬の日に
君に送らん花もがな

作詞　島崎藤村
作曲　藤江英輔

クラブが、「惜別の歌」のレコーディングを企画する。藤江さんは、この相談を受け了承するが、問題が一つあった。

それは、原詩の一部分を断り無しにうたっている、例の「かなしむなかれわがともよ」の部分のことを含めて、著作権者の承諾が必要なことであった。

幸いなことに、当時の藤江さんは仕事の繋がりから、作詞者島崎藤村のご子息で、著作権者でもある画家の島崎蓊助氏の了承をいただけることとなる。

藤江さんは、この時のことを、仕合わせな巡り逢いであったと、謙虚に仰言っているが、当時は、たいへんな努力をなさっている。

昭和三十年十月、惜別の歌は、日本コロンビアからレコードとなって、発売された。

島崎藤村作詞、藤江英輔作曲、大内福三郎編曲、合唱中央大学男声合唱団、伴奏中央大学音楽研究会管弦楽団による。七十八回転のSP盤で、裏面は、伊豆逍遥歌である。

戦後直ぐから、中央大学でとくに予科生の間でうたい継がれてきたこの歌は、かつて、藤江さんの脳裏にきらめき、胸を搏ち、作曲に至るまでの動機や、懊悩や時代背景やを超えて、中央大学の歌として定着してゆくのであった。

さて、このごろ、時を同じくしてと言ってよいかと思うが、この「惜別の歌」のレコードが発売された頃の東京の盛り場には、うたごえ喫茶なる店が多数出現した。

どの喫茶店も夜ともなれば、若者で充満した。その多くは学生たちであり、まさに青春を謳歌する坩堝のごとき場となるのであった。

これに目をつけたレコード会社が、ヒットチャートというか、ベストテンというべきか、それら喫茶店でうたわれる曲の上位の歌をレコード化しようとした。この上位に、我が中央大学惜別の歌がランクされていた。

紆余曲折があって後、ついに、専門の歌手によって、レコードに吹き込まれることとなる。歌手は、あのヒット曲「北帰行」をうたった小林旭であった。

惜別の歌は中央大学から社会へ翔びだし、市民権をえた如くに、大衆に浸透していったのである。

盛り場では、毎夜のようにこの歌がうたわれたのであるが、作詞と作曲のそれぞれの動機の全く異なるこの歌が、戦後二十年を経てから、若者の胸を搏ったのである。とにかくレコードはよく売れたようである。

中央大学においてうたわれる惜別の歌は、島崎藤村の詩八連のうち、右に掲げた四連が親しまれうたわれてきている。我々の学生時代は、だいたいこの四番までがうたわれたが、現今の卒業式などでは、三番までをうたうのが通例となっている。

卒業式で、学員会の支部で愛唱

昭和二十年に作曲されたこの歌が、戦争が終わって、学園に平和が戻って来て、学徒動員された予科学生たち、そして、応召出陣していった学生達が戻って来るとともに、あたかも昔から中央大学に存在していたかの如くに、この歌ももどってきたのである。

そして瞬く間に予科生の間に広まり、やがて、専門部生、学部学生へと広まり、そして、中央大学の歌として、卒業式、送別会、卒業同期会、学員会支部会合等々でうたわれるようになり、今日に続いている。

この歌を贈られ、この歌に送られ、出陣していった多くの未帰還中大生のあったことに思いを致しつつ、これら先輩に対する鎮魂歌であると言ってもよいこの歌をうたうとき、うたた今昔の感慨が胸中を去来して止まないのは、私だけではあるまい。

それから三十余年、昭和五十三年、中央大学文系四学部は、新装なった多摩校舎へ移転開講する。

そして昭和五十五年三月、それまでの約百年の間、中大生を育んできた神田駿河台の校舎との別れの日がやって来た。

昭和五十五年三月二十二日、中央大学駿河台校舎閉校祭が行われた。

別れを惜しむかのように雪が降る。雪はいつしか牡丹雪となった。閉校祭の後、この牡丹雪の舞う神田の町は、中大OB、大学関係者、駿河台町内会の皆さんの別れを惜しむ三千人の提灯行列で埋まっていた。

これより先、大講堂における閉校祭の棹尾となったこの日の「惜別の歌」は、これまでの、いずれの時、いずれの所でうたわれた別れの寂しさにより増して、うたう人の胸に万感去来する回想とともに胸をうち、等しく目を潤ませながらの大合唱であったことを銘記しておきたいのである。

♪

そして、中大生の愛唱歌として五十年もうたい継がれているのは、惜別の歌と、伊豆逍遥歌であろう。いわば中央大学学生歌の双璧であると言ってよいかと思う。

この惜別の歌の稿については、本来なれば作曲者である藤江英輔氏に執筆して頂くべきであろうが、私はかつて、藤江さんから惜別の歌の稿を起こすことについて、一任をいただいていることをお断りしておきたい。

なお、藤江英輔氏は、かつて中央大学の教養雑誌『中央評論』に「消えぬ足音」と題して、惜別の歌の周辺と背景を執筆されている。

白門の由来

一　白門とは

元の駿河台校舎に「白門」が完成したのは昭和三四年八月八日で、聖橋通り（表通り）へ進出した本学は、白御影石の重厚な白門を建造し、開通式を行っている。

聖橋通りに面したこの白門の偉容は、一〇階建て（はじめ、七階建）のビルの校舎にマッチして、都市型大学、あるいは都心型大学として、近代的センスに充ちたたたずまいをみせていた。

白門を入ると左手に噴水池があり、この噴水が少しばかり変っていて、人はこれをカラカサ噴水などと呼んだりしていた。現在の多摩校舎とは比べようもないが、わずかばかりの芝生もあり、憩のひとときを楽しむ学生もあった。入学式や卒業式には、きまって、この白門の前で、写真をとる風景がみられたものである。

理工学部校舎の正門は、白い門柱である。この門は、現在の理工学部校舎が、完成をみた昭和五五年に建造されている。門構えは門の字の如くで、門柱は白タイルで飾り覆われている。門扉は、久しく白門を象徴していた旧駿河台校舎旧正門の鉄扉を移設したものである。

つまり、歴史的伝統的に「白門」である。

多摩校舎の正門は、草のみどりに風薫る、丘に目映ゆき白門を、と校歌にうたわれるとおりの壮大な白門で、真夏の太陽の下などでは、眩しいくらいである。門はその家の顔であるとも言われることからすれば、白門は、中央大学の顔と言えるかもしれない。

二　白門の由来

本学の別称あるいは愛称、通称とも言える「白門」の呼称は、いつのころから用いられ始めたのであろうか。そしてこの呼称が、どのような意味あいから使い始められたのか、そのルーツを探ってみるが、どうも、詳らかなことはわからない。古く白門の文字が登場するのは、昭和四年五月二五日、中央大学新聞第三号「提言」の中で、白門の使命の記述があり、同年六月一〇日の第四号で、コラムの標題「白門の聲」がある。同年、一一月三日の第一〇号には、運動会の記事見

出しとして「白門健児飛躍の秋深く……」などと用いられている。中大新聞の創刊は、昭和四年四月二五日であるから、「白門の聲」は、はじめから使われていたかと推定することはできる。（残念ながら、本学に、中大新聞の創刊号～二号は、保存されていない）しかし、それより以前にいつ頃からかの推定はむつかしい。中大新聞が、初めて白門の語を使ったのか、この年に、突如として白門を称するようになったとも思えないし、昭和四年より以前に白門を称する要素要因があって、一般的になったと見るほかにないのである。

白門の考え方の中核をなすのは、「法科の中央」を学生がはっきり意識し、なかんずく、東大に対する中大、官学に対する私学、東大の赤門に対する白門であると言う、類型的発想があったのかも知れない。すなわち、東大の象徴的建造物である赤門に対する意識が、純粋に「赤」に対する「白」であり、そうして東大卒が赤門出であるならば、中大卒は白門出であるという発想があったのではないか。猪間驥一元商学部教授の東大対抗説「そっちが赤門なら、こっちは白門だという気概から、自然と生れた中大生の在野精神の発露ではないか」（中央大学学報三〇巻二号）に集約されるかもしれない。

入門とは、教えを乞い、教授を受けるために、組織的な、あるいは結社的な団体または個人にしたがって、学問的あるいは稽古的なことを始めることであり、門をたたくとも言われてきたが、現在でもそうである。

右とほぼ同義において、建学の精神とか学風に馴染んで修学し、卒業してゆくことを○○門出身と称するようなことが、一般に行われ、現在でも門下生とか、門人とか、たんに○○門とか言うように用いられている。

この考え方の延長線上に、前記の理由を併せて、簡潔に白門と名付けたのではないのだろうか。

ただしこれは、いつ、誰が、定めたことでもなく、誰言うとなく、ごく自然に、そうなる要素要因が醸され、学生および、卒業生の間から、自然発生的な所産としての名称となったのではないかと考えるのが穏当であろう。

三　白門の呼称定着

活字記録からは、前述中大新聞記事を起源とするしかないが、徽章はすでに、大正六（一九一七）年から白であるから、その頃すでに、白門と称していたかもしれない。

（校名を中央大学としたのは明治三八（一九〇五）年からであり、このとき以来徽章はあったはずと推定はできるが、明治三八年から大正六年に至る期間の資料の中に徽章についての記録が見あたらないので、やむをえず、大正六年からと記述しておかなくてはならない）

白は、それのみで神秘であり、純粋であり、正義、潔白の意味合いを含み「法」の尊厳に対比し得るし、とくに徽章を、白の七宝焼としたことで、ますます「白門」のイメージが濃くなっていったのかも知れない。

中大新聞以外の活字記録では、中央大学学報第三巻三号に「東鐵白門会」設立の記事をはじめとして、見ることができる。そして、昭和一三年頃には、中大通りに、白門堂・中央書房なる本屋があり、白門麻雀倶楽部などもあったから、このころはさかんに白門の名称が、用いられたとみてよいであろう。

白門の呼称を決定的にしたのは、昭和二四年四月、中央大学通信教育部から刊行の補助教材「白門」創刊号である。

加藤正治総長が寄せている「創刊のことば」がある。

『(前略) 特に優秀なる司法官、弁護士を輩出したる点においては、従来東京大学と一二を争い来たりたるところにて、東京大学の赤門に対して自然に本学を白門大学と一般に呼称するに至りたるものである (中略) この名誉ある呼称を取りて「白門」と命名したのである。(後略)』と。

昭和二五年四月には、白門ジャーナリストクラブが結成されるなど、「白門」は、中大OBの集いには必ず冠せられるといってよいほどになってゆく。

昭利二五年八月、制定発表の新校歌には、「丘に目映き白門を……」と歌詞の中に挿入されるに至り、白門は中央大学の別称として完全に定着したのである。これよりさき、昭和二三年六月中央大学学友会選定の新応援歌の一番の歌詞には、「伝統誇る白門の闘い挑む旗仰げ……」があって、すでに白門が定着されていたといえるだろう。

昭和三〇年頃には、聖橋通りに「白門」という喫茶店も現れ、本学駿河台校舎周辺は、白門一色といってよいほどとなり、白門食堂には、白門定食とか白門ラーメンなるものまで出揃ったのである。

学内外で、白門、白門と言いながら、東大の赤門に対する中大の象徴的建造物としての白門は、昭和三四年までは現実に存在しないままであった。聖橋通りに面して建てられた白門をもって、名実共に白門をうたえるようになったのであるが、それまで、正門であった (のちに南門と称ぶ) 旧正門は、白色の門柱ではなかったが、当時の学生、卒業生は、「白門」として、卒業アルバムに載せたりして親しんでいた。

ともかく、聖橋通に建てられたこの白門は、学生、卒業生が、「白門」をこよなく愛した所産でもあろう。

四　心のうちなる白門

白門のはじまりは昭和四年以前のことはさだかではないが、本学は、はじめ法律専門の学校であったことから、法の正義、

純粋、そして赤門に対抗する意味であった白門の呼称が生れたのであろうが、今や、法学部、経済学部、商学部、理工学部、文学部、総合政策学部の六学部を擁する大学となり、そして白門は、全学を象徴する本学の愛称として名実共に親しまれていると思うのである。

実物の「白門」が存在しなかった時代から、卒業生は白門出身を言い、OB会は、必ずといってよいほどに、この名称を用いてきた（白門水泳会というように）。そして少なくとも、この伝統は、半世紀以上を閲している。つまり、学生、卒業生のそれぞれの心の中に、「白門」はずっと存在してきたし、現在では、多摩校舎、理工学部校舎とも、象徴的に、また存在証明としての白門があるのだから、こののち時代が移り変ろうとも、この白門は、学生、卒業生の心の点景として消えることはないであろう。

いまや白門こそ、本学を象徴し、学生、卒業生が一体となることのできる、共通の称号と言ってもあながち過言ではあるまい。

理工学部校舎の白門

あとがき

校歌をはじめとして、本学学生に古くからうたわれてきた歌、今もうたわれている歌を、学生時代から知り得た事実を基礎に記述し、広報部刊「Ｈａｋｕｍｏｎちゅうおう」に連載したものを底本として、中央大学の歌をまとめました。

世相の変転の激しい中で、これらの歌が風化していかぬようとの広報部長の薦めに応ずる形で文章化してみましたが、もとより各歌の周辺エピソードについて、正鵠を射ているかは、甚だ心許ないのであります。此度、第一版の改訂版として、一部加除訂正をほどこし、二版としました。

「白門の由来について」を付録とし末尾に掲載いたしました。

この小冊子のために、第一版刊行より、多くの方々から貴重な証言や資料の提供、ご示唆ご指摘を戴くことができましたことは、まことに有難く、ここに、厚く御礼申し上げますとともに、この冊子に対し、多くのご叱正を賜りますれば、幸甚であります。

平成八年三月

著者

〈参考文献〉

中央大学七十年史
図説中央大学
中央大学学報
中央評論
文研記念誌「蘭交」
草のみどり（父母連絡会誌）
Ｈａｋｕｍｏｎちゅうおう（広報部学生対象広報誌）
学生のしおり
学園生活
中央大学新聞
中央大学学員時報

中央大学の歌（第三版）

平成二九年八月二十日　第三刷印刷
平成八年三月二十日　第二刷印刷
平成七年三月二五日　第一刷発行

著　者　大　矢　章　一
発行者　浜　松　晃
発行所　中央大学広報部
192-0393　東京都八王子市東中野七四二－一
電　話　〇四二六－七四－二一四三
ＦＡＸ　〇四二六－七四－二一四八
印刷所　泰成印刷株式会社
130-0026　東京都墨田区両国三－一－一二
電　話　〇三－三六三一－八一四一

禁無断転載（非売品）

別冊

Hakumon ちゅうおう